

11
83

插花之栞

076008-000-2

192-83

插花之栞

入沢 晃輪/編

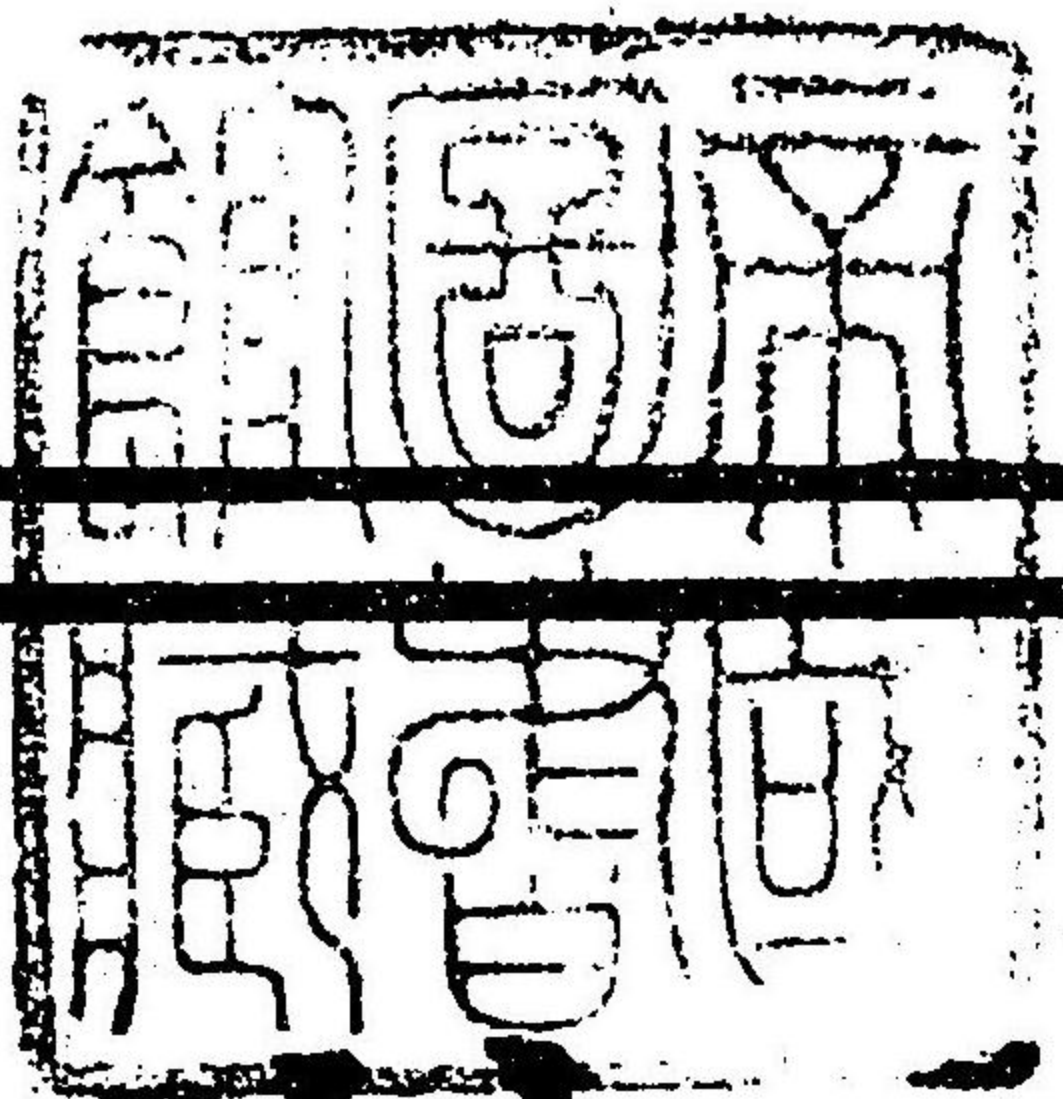
M33

CEO-0179



192
83

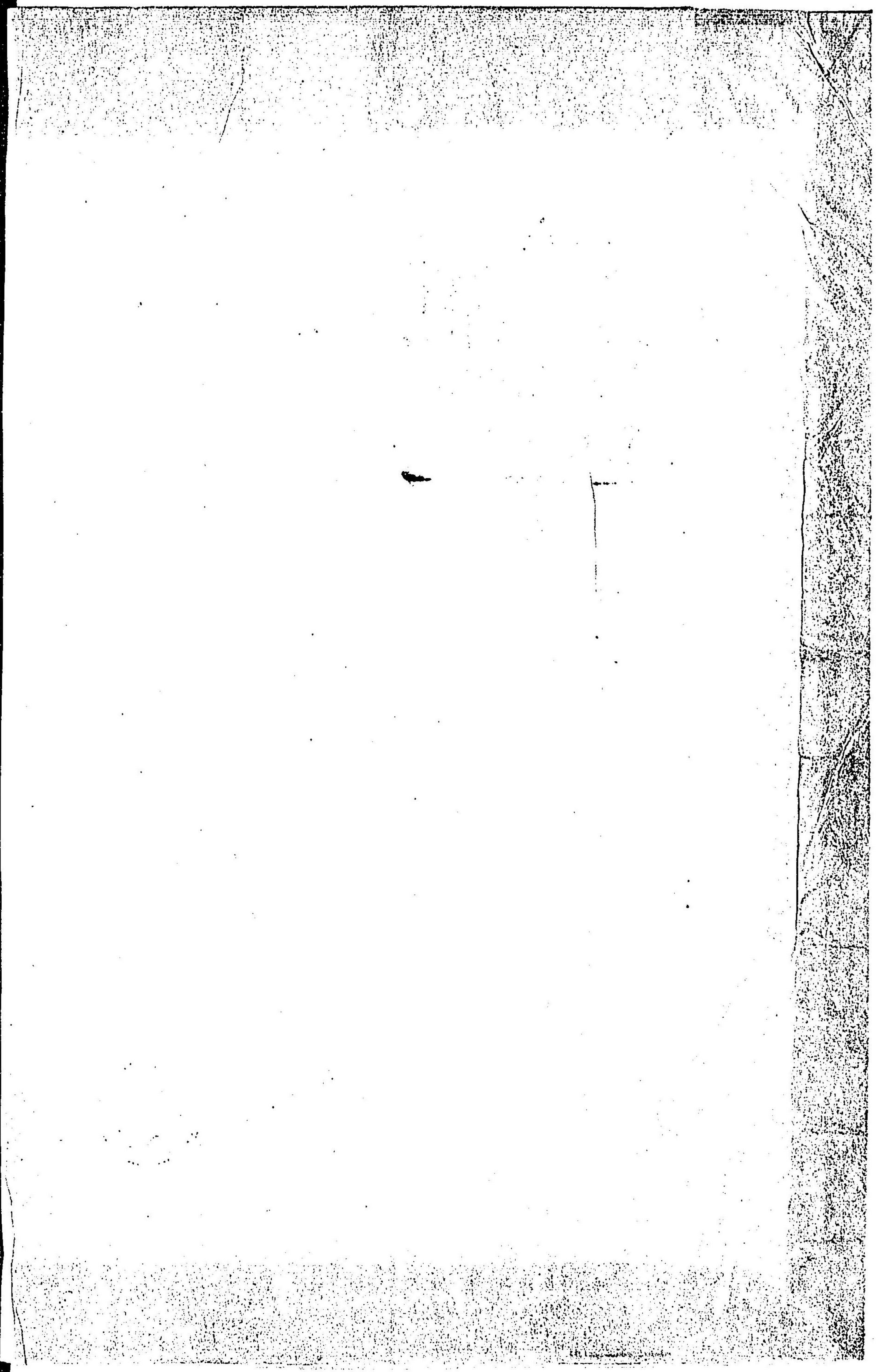
挿
卷
之
葉



插花之集

准三房

翠陽房



目次

- 一 挿花四季五拾籠圖式
- 一 生花季初の心得
- 一 系葉の陰陽年系勝手的心得
- 一 系葉五枚七枚組立の心得
- 一 客位主位の區別
- 一 生副祥天地人の大旨
- 一 床の勝手よりして花を左右の生方より
- 一 床揃の圖式
- 一 花を見るの禮式



花の

志

花の

花

花

花

花

花

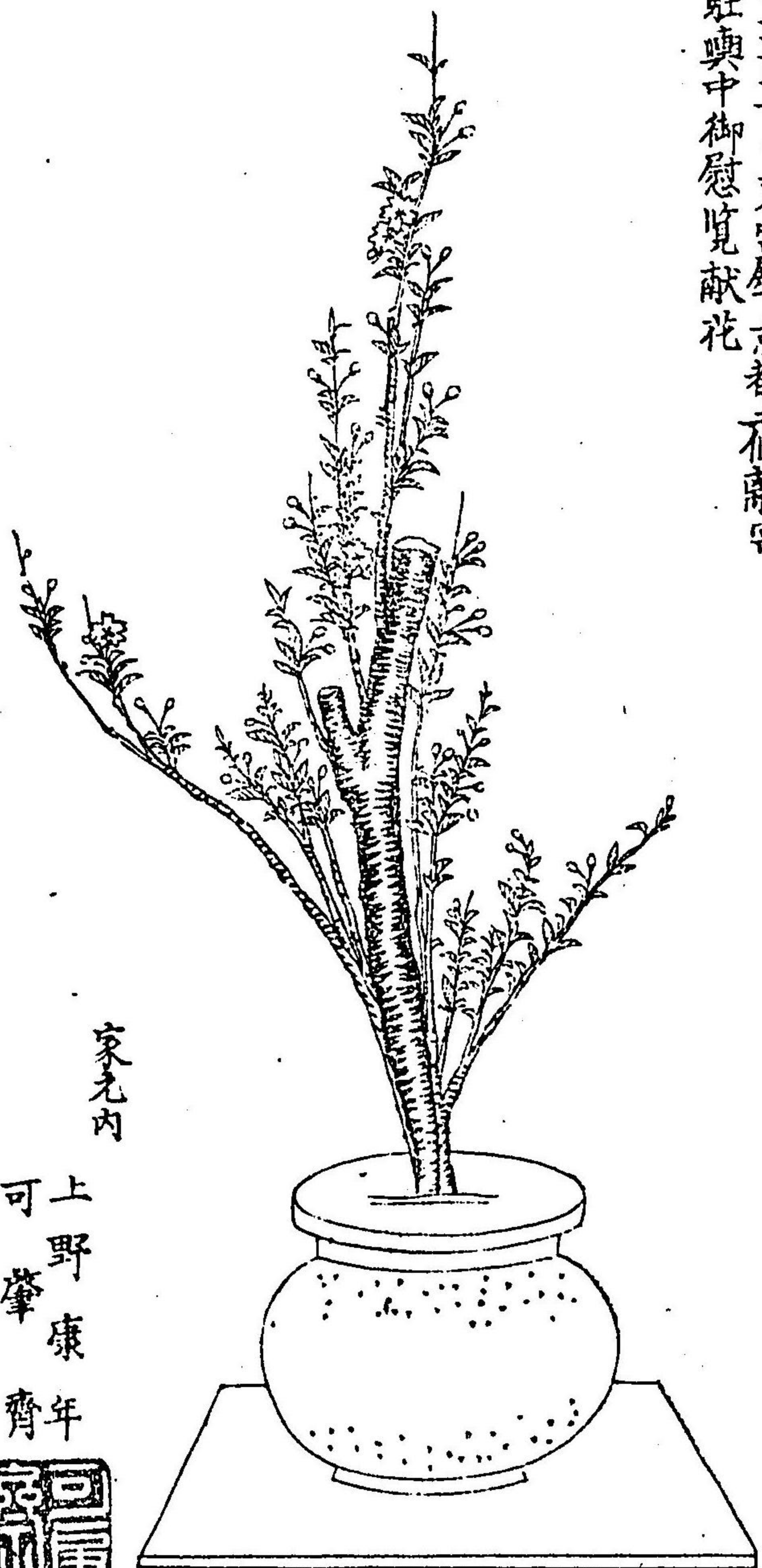
花

明治三十三年一月一日



專正
唐

明治三十三年十月 東宮殿下京都二條離宮
御駐輿中御慰覽献花

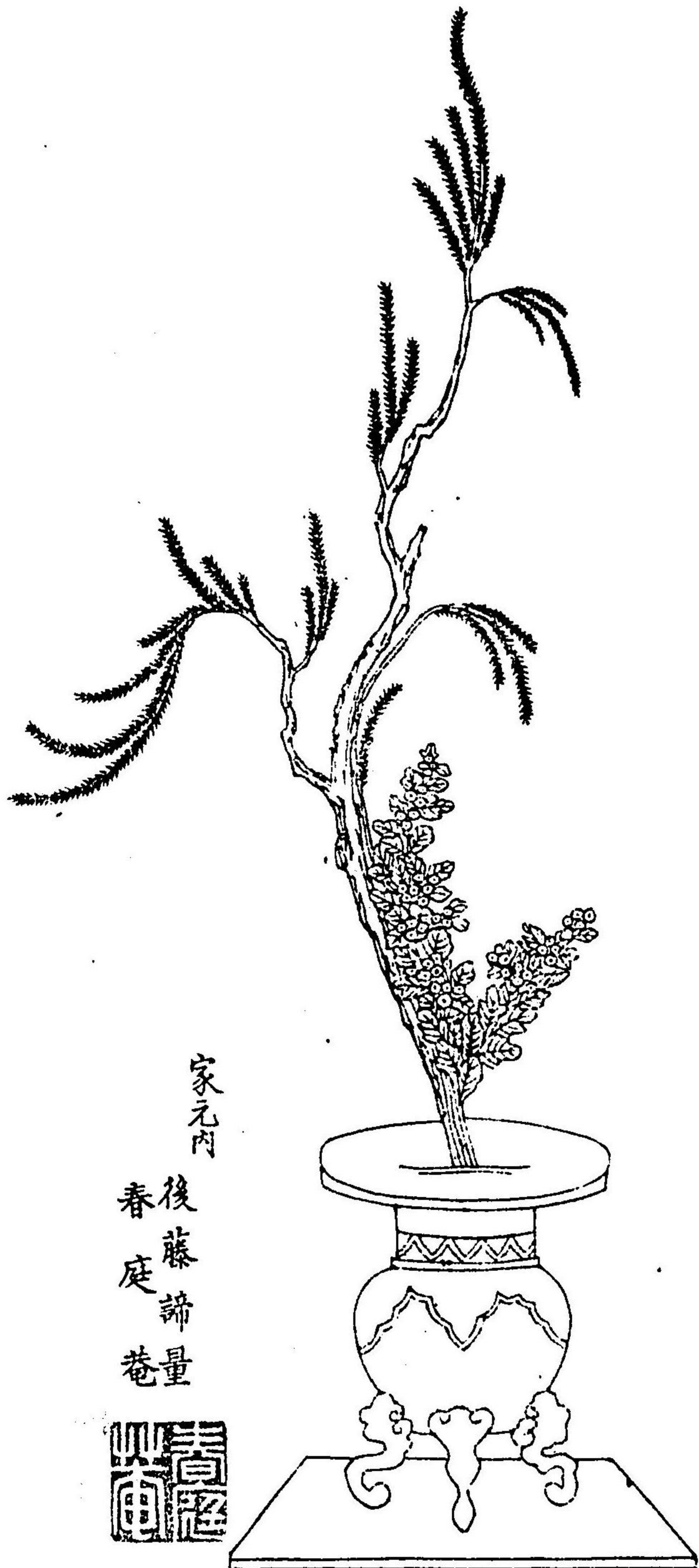


家元内

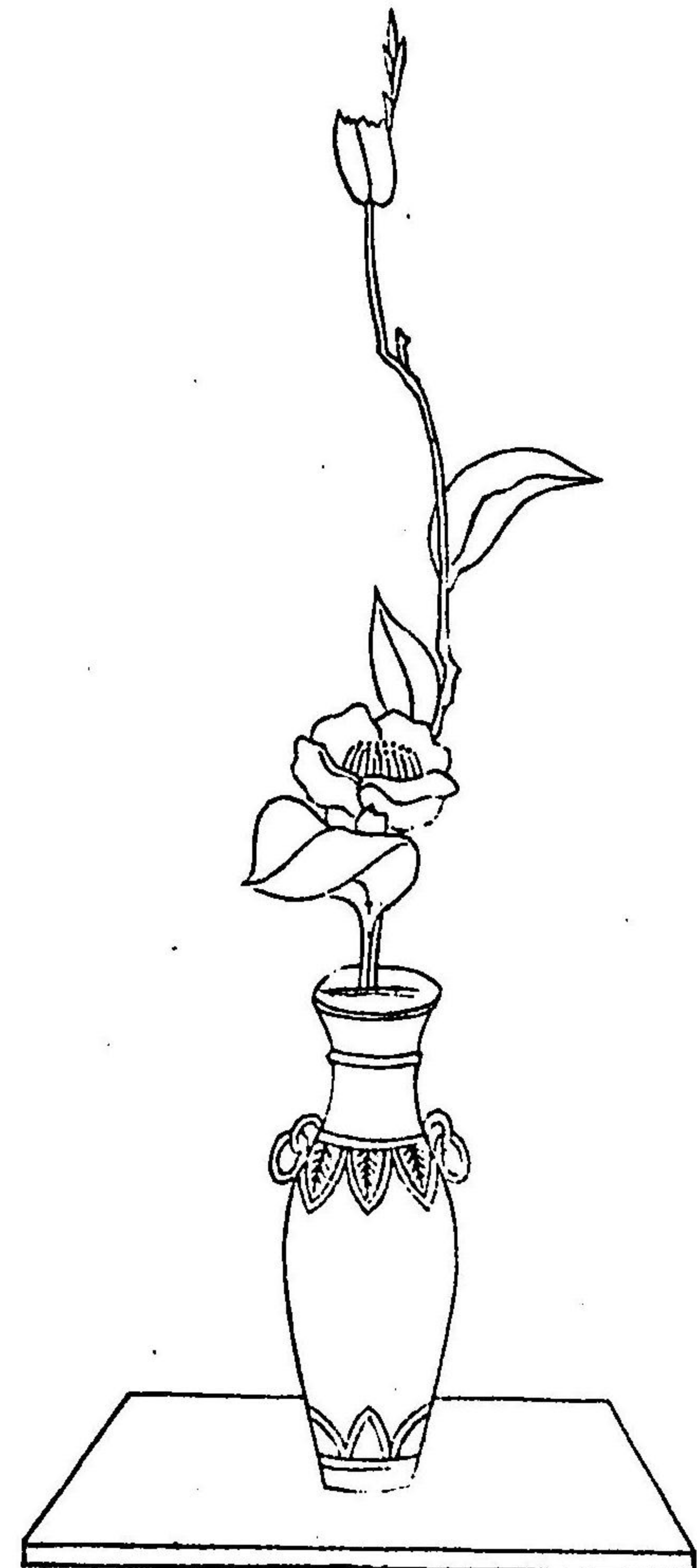
上野康年
可肇



明治三年十月東宮殿下京都三條離宮
御駐輿中御慰覽獻花



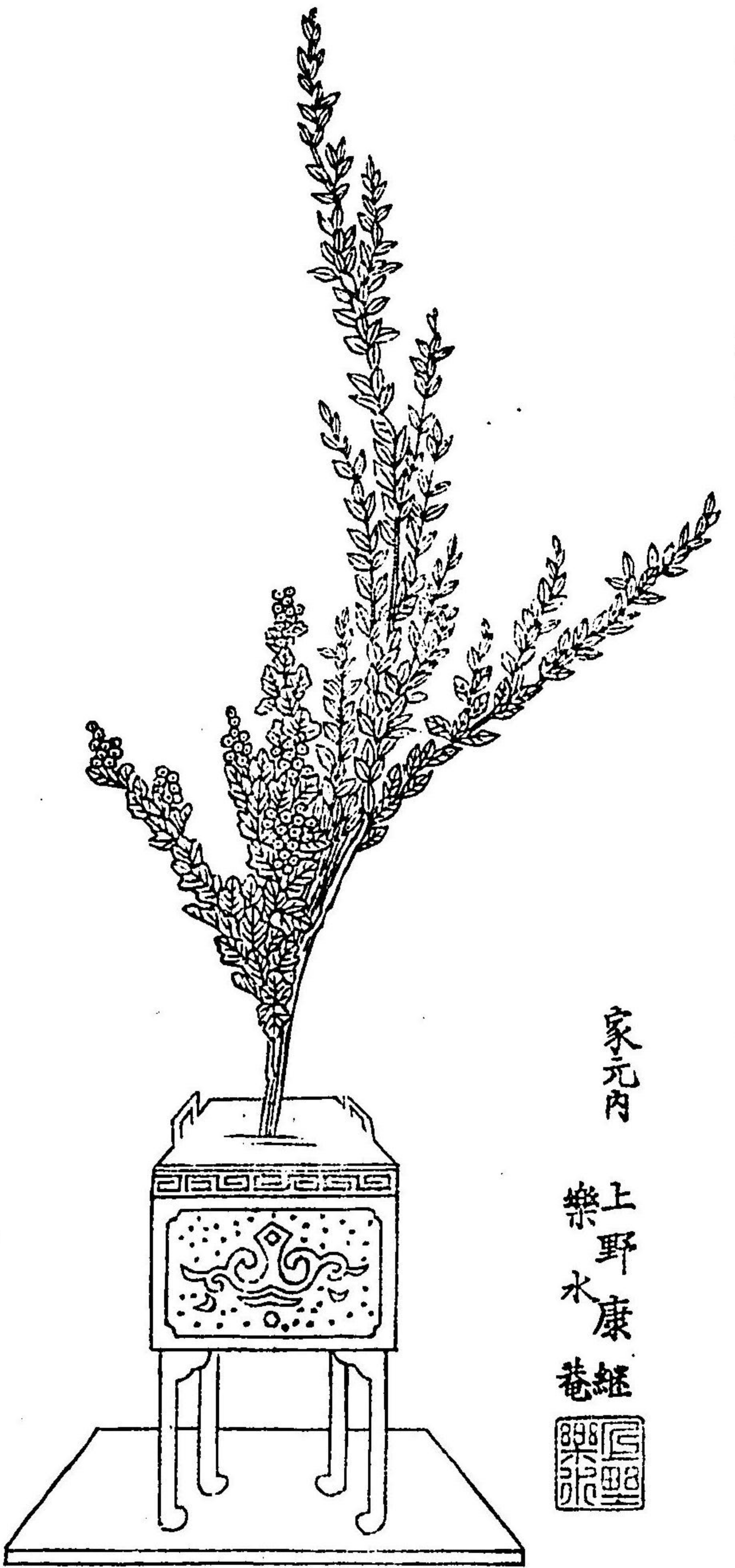
家元内
後藤諦量
春庭 菴



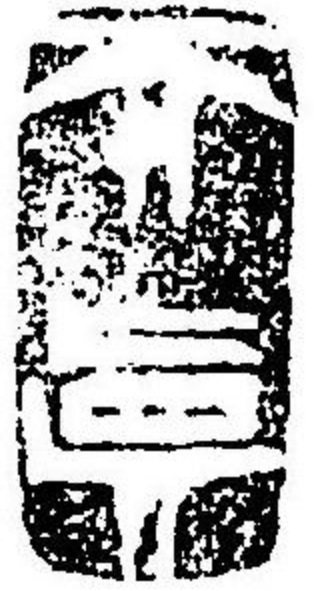
家元内
武藤松菴



明治三年十月 東宮殿下京都二條離宮
御駐喜御慰覽献花



家元内
上野康経
樂水菴

瓶
七
七
七

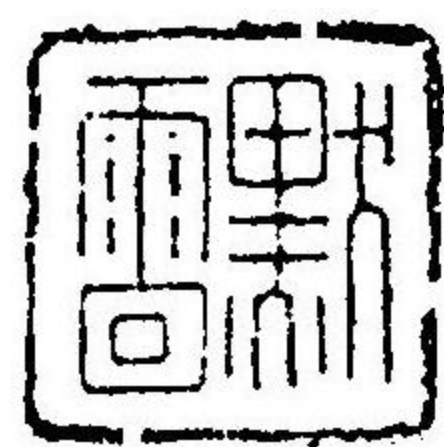
た
た
た
た
た

瓶
七
七
七

升之

花如

明臨
雨田
作



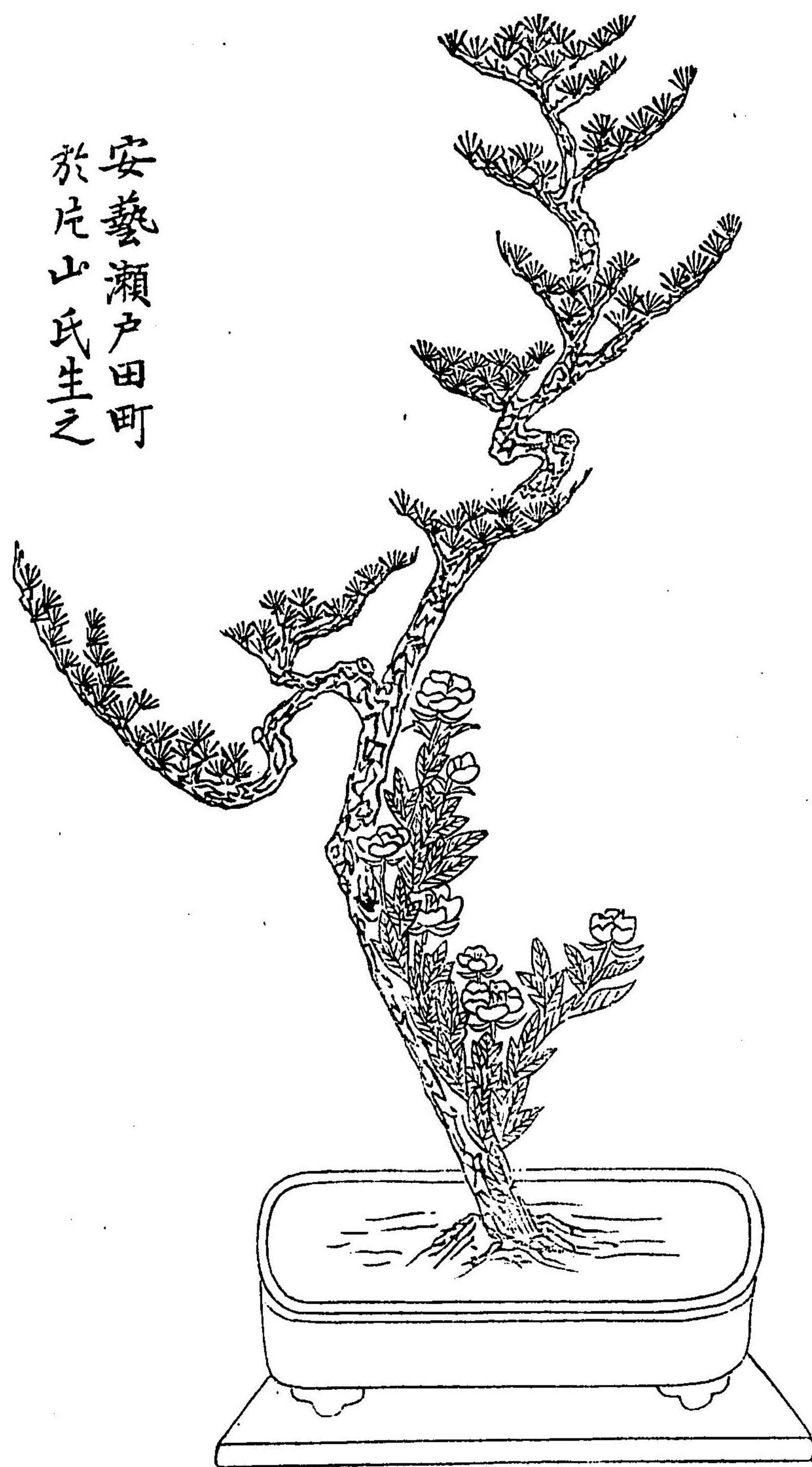
嘉永二年六月西備三原町
善教寺於會席生之





明治十二年十月
瀬戸田町竹木氏之
於茶園生之

根ノヤブコウシ

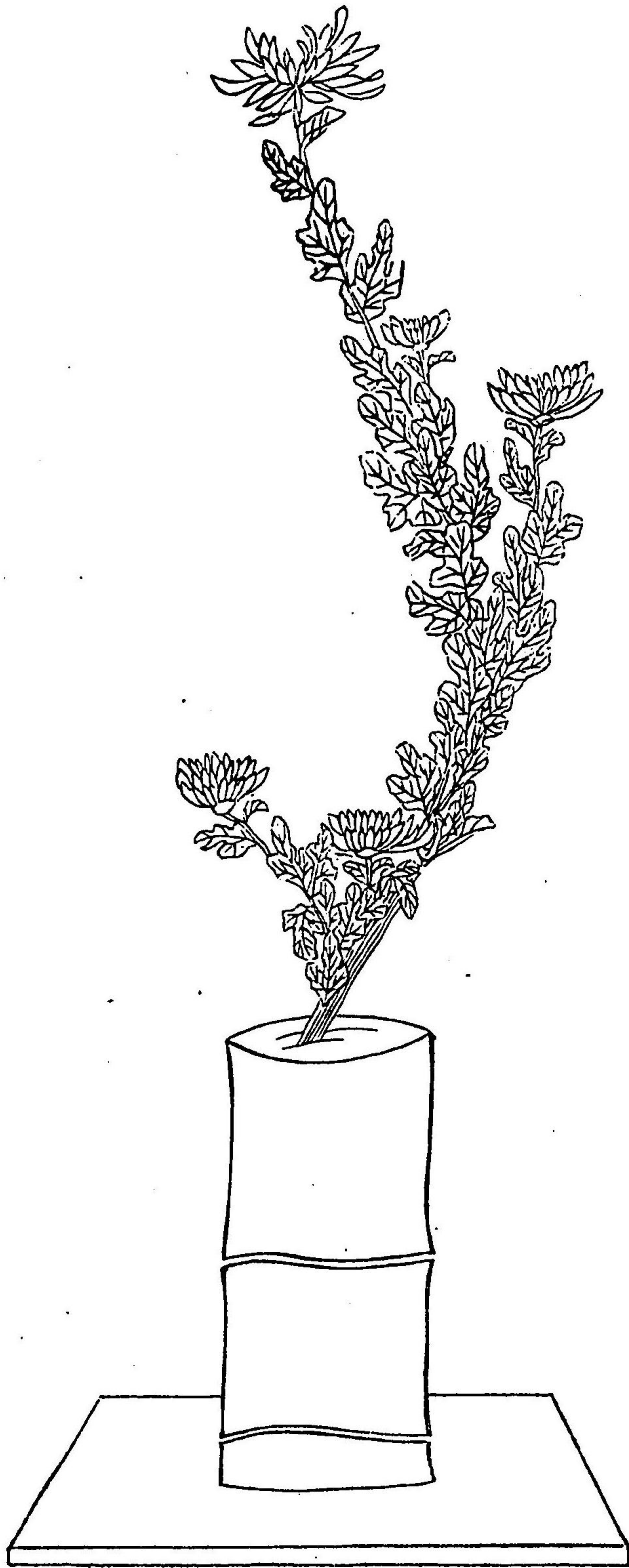


安藝瀬戸田町
於片山氏生之

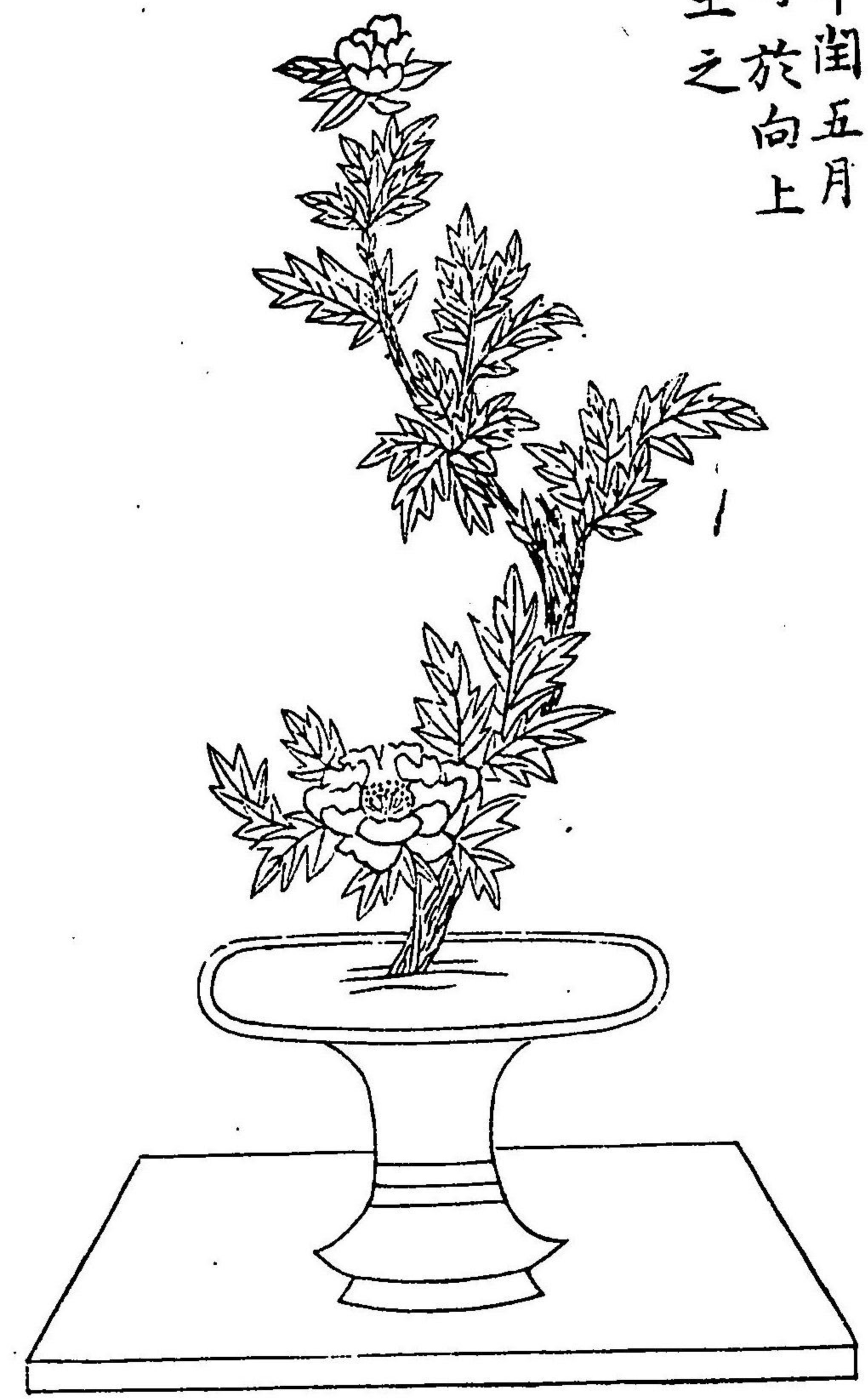
明治十三年十月九日
於自坊生之



備後三谿郡吉舎村明覚寺
日野連枝殿御巡錫之節於
御座席奉生之



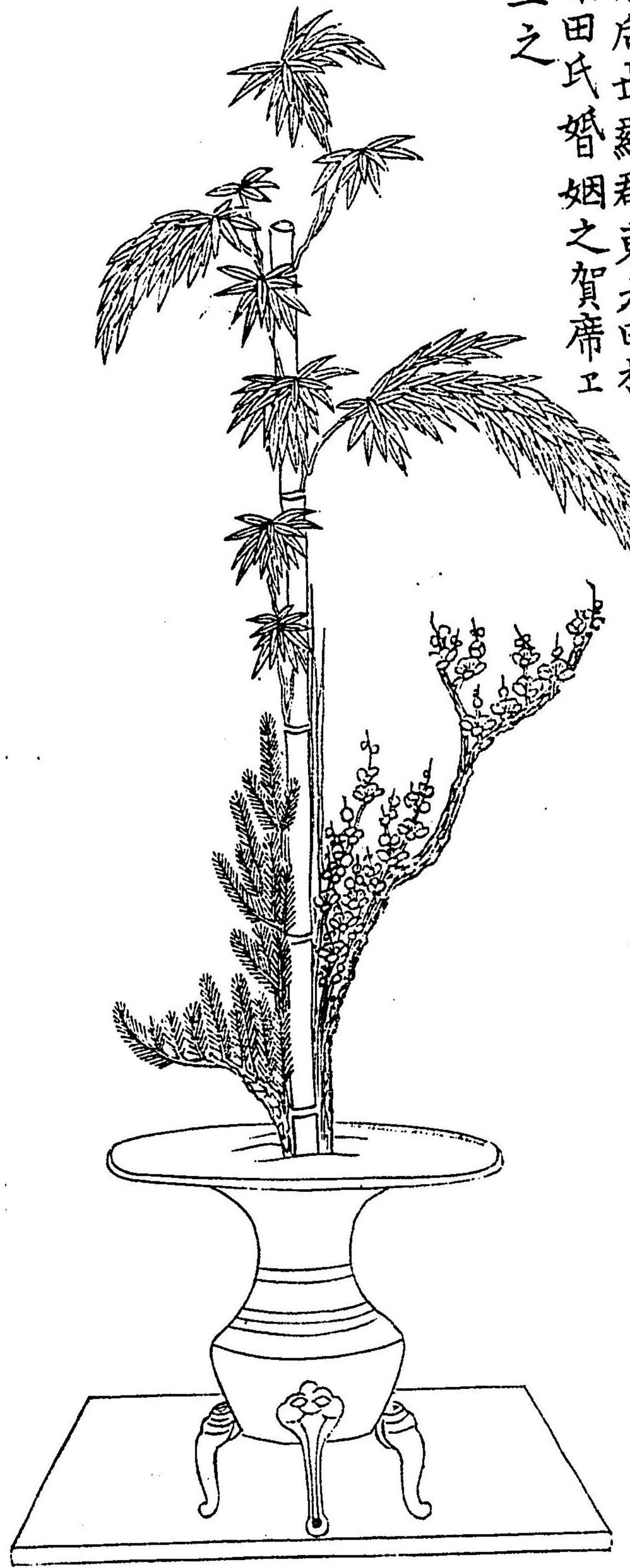
慶應元年閏五月
瀬戸田町於向上
寺客殿生之



明治廿三年三月十七日
豫州岩城島於法藏寺
客殿生之



明治廿三年三月九日
備后世羅郡東大田村
原田氏婚姻之賀席工
生之



明治廿五年六月
岩城島於大平寺
生之

バへ根シメ小菊

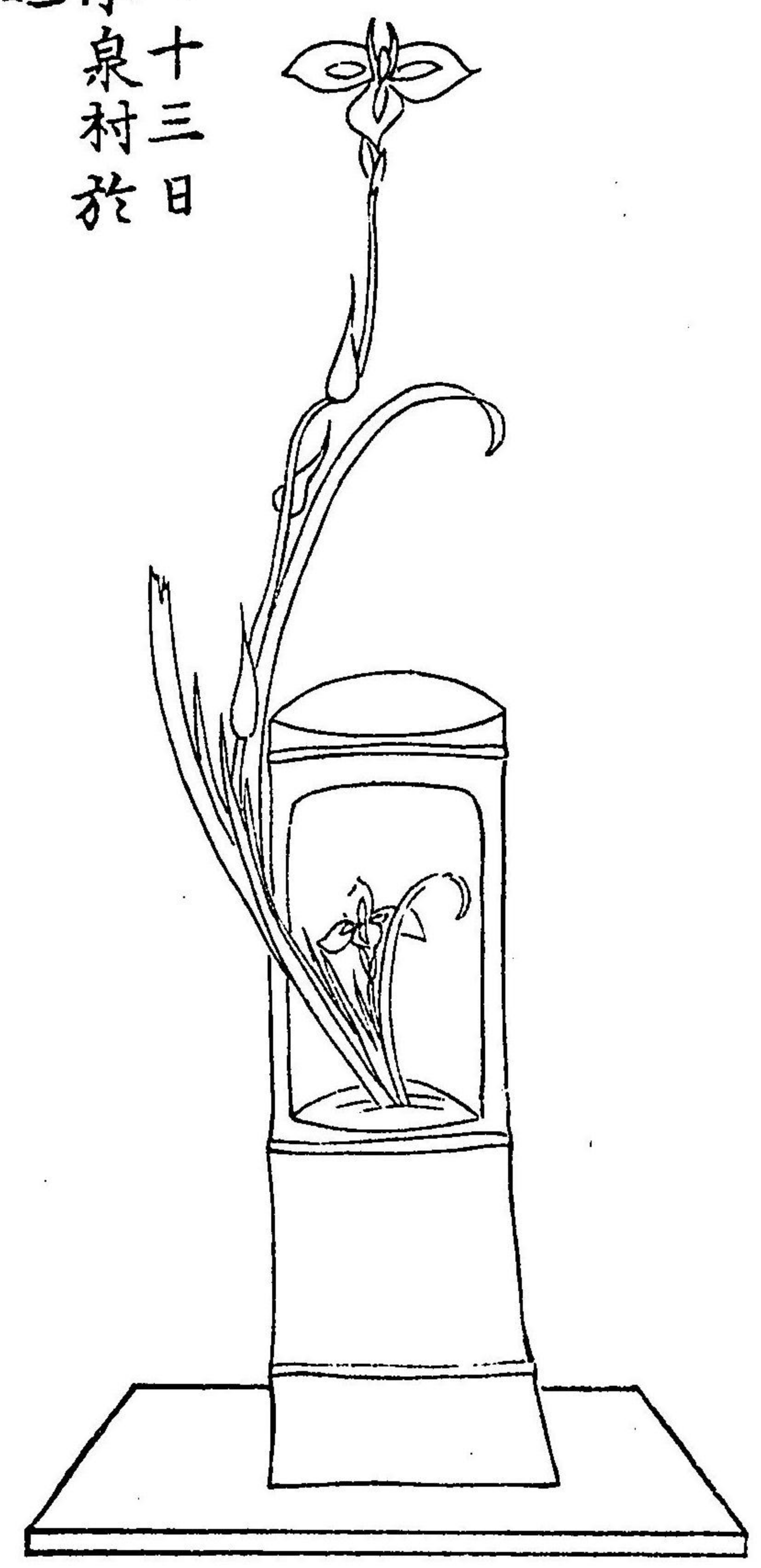


明治廿三年九月十日
備后沼隈郡本鄉村於
光讚精舎生之

根ノ白玉椿



明治廿年十月十三日
安藝豊田郡小泉村於
泰蔵精舎生之



明治廿三年三月十五日
備后沼隈郡本鄉村於
東藏坊生之



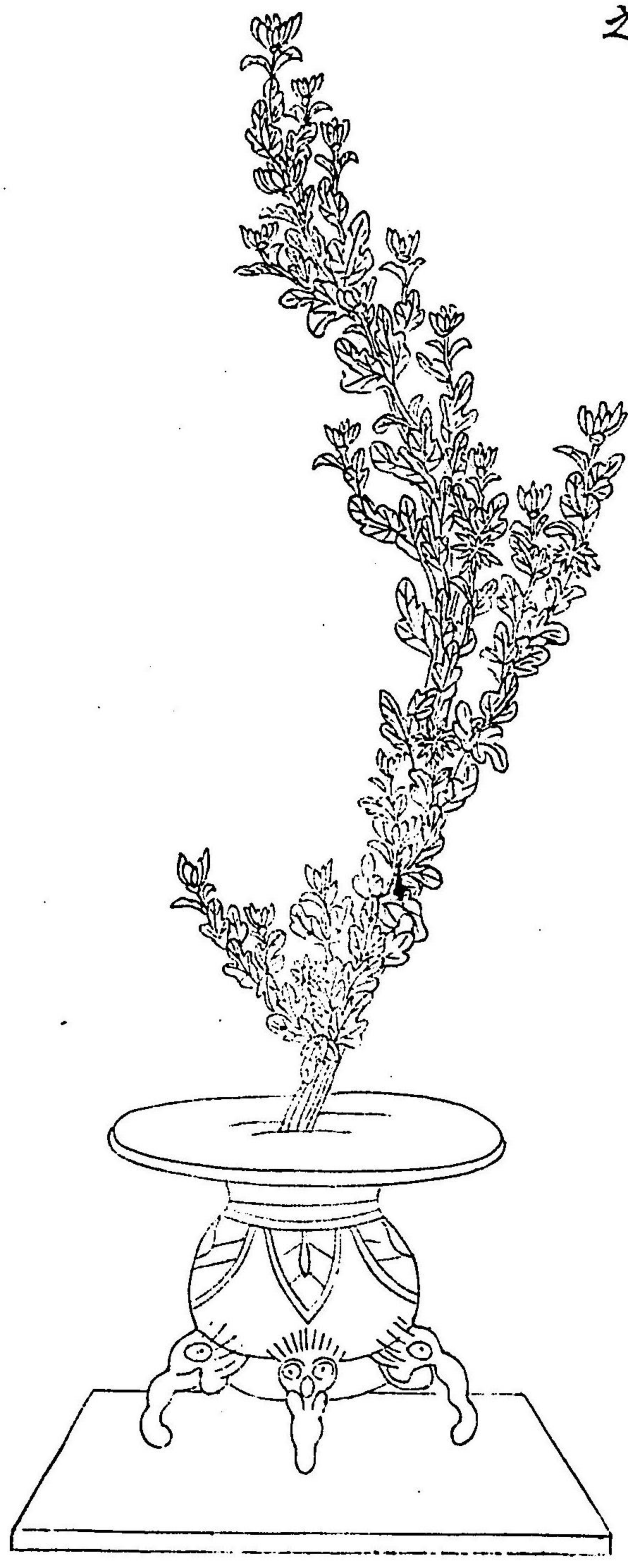
明治廿五年四月五日
安藝蒲刈島於住村
氏生之



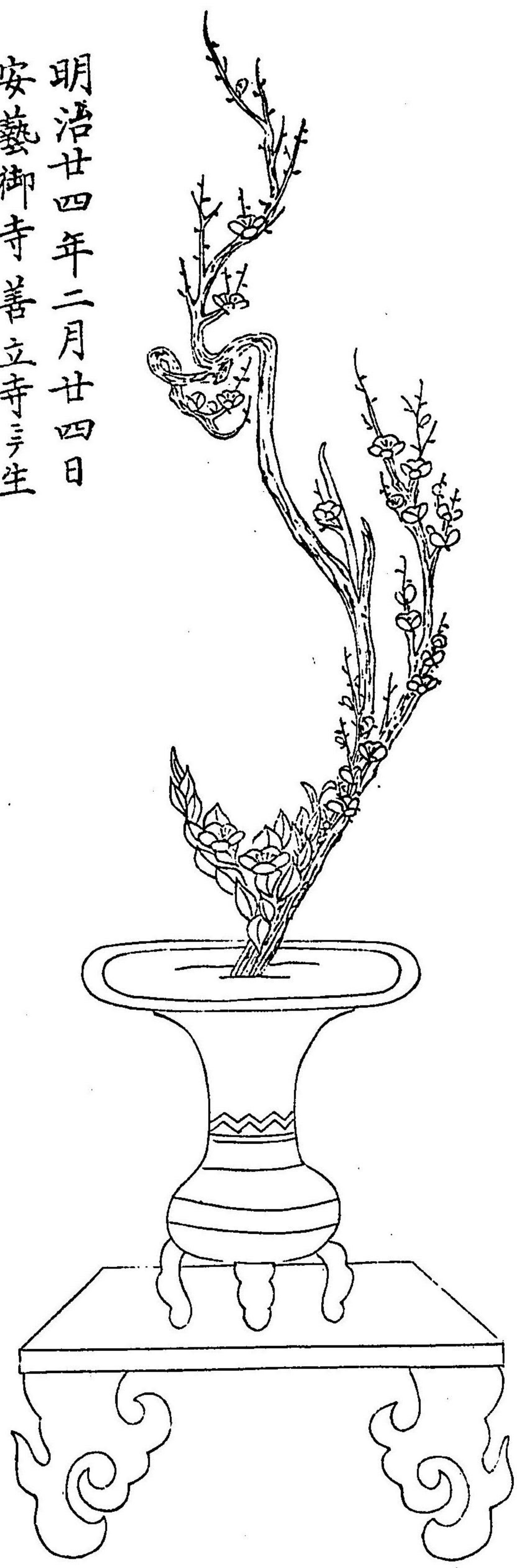
明治廿五年四月廿三日
備后三原町於頤勝精舎
生之
白玉椿



明治廿年十月十六日
安藝小泉村於恭藏寺
生之

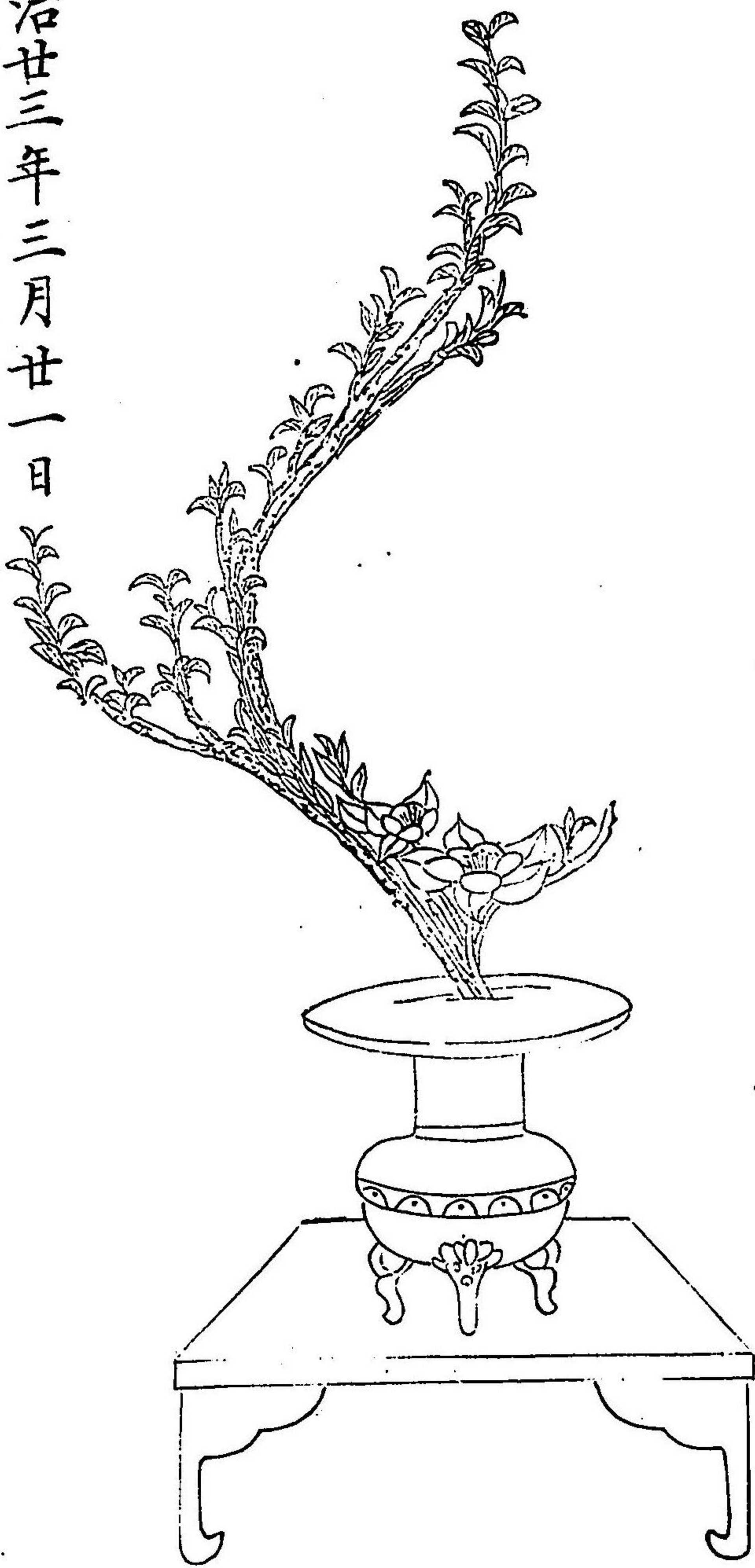


明治廿六年四月十四日
備后博練教校世話係
高田西峯居士追吊會
執行之席生之



明治廿四年二月廿四日
安藝御寺善立寺主生

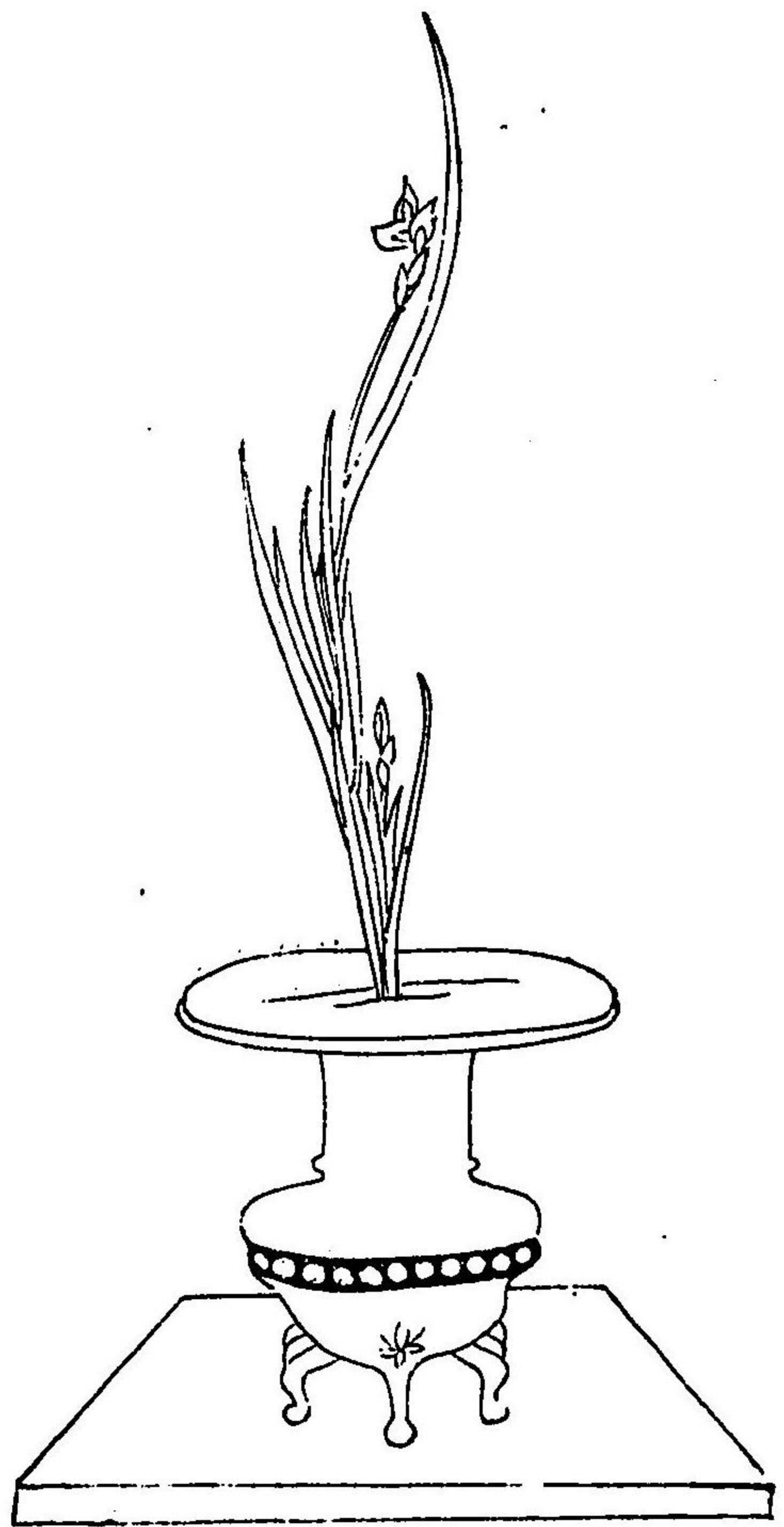
明治廿三年三月廿一日
備后本鄉村於光讚寺生之
禎之后葉根之椿



明治廿四年三月十二日
於光讚精舎生之



明治三十一年四月廿一日
於家元生之



明治廿五年五月
廿八日真良村於
福泉精舍生之



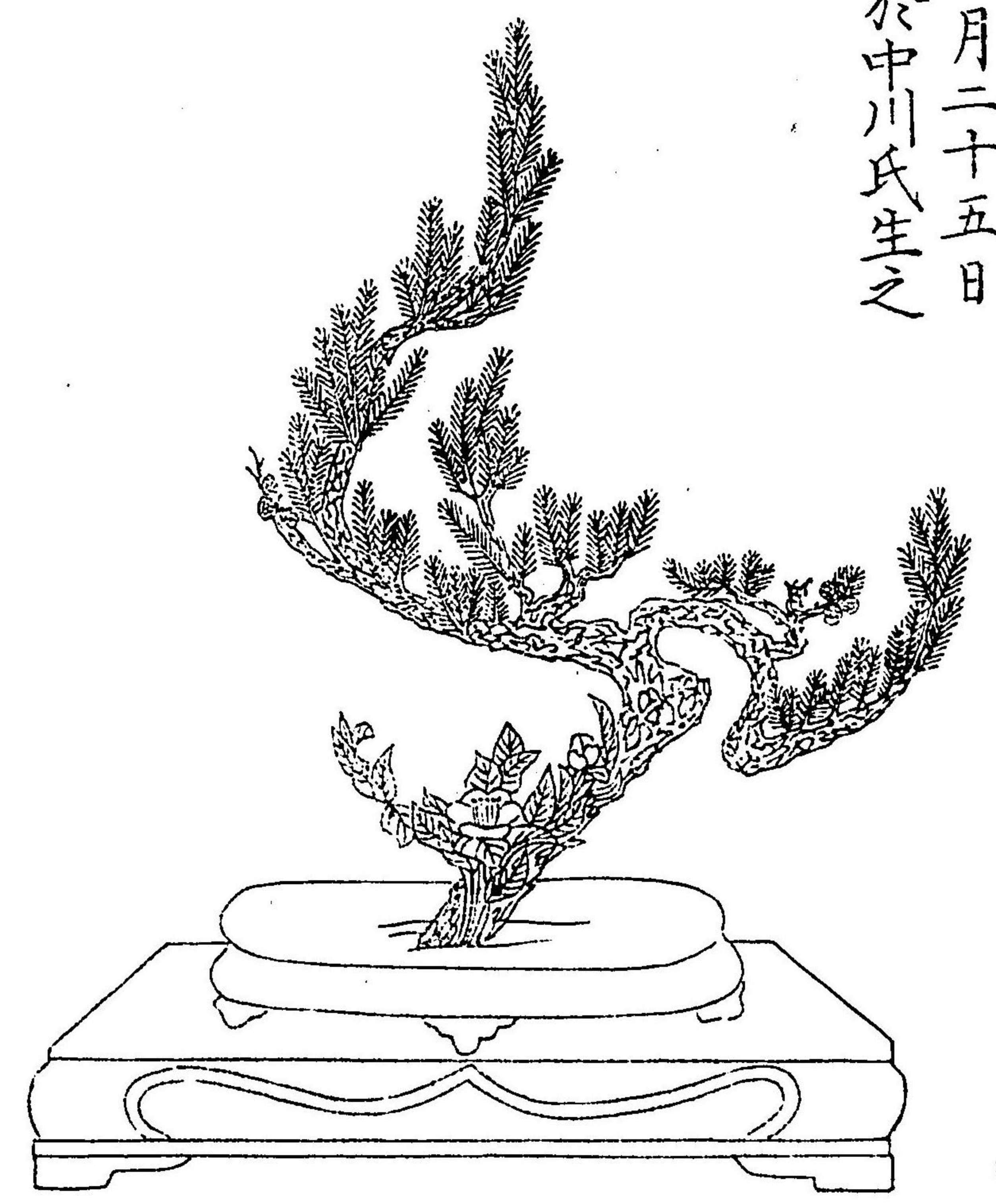


明治廿五年二月十九日
 豊田郡長谷村於入澤氏
 生之根之水仙



明治廿五年五月十日
 安藝大草村於真行寺
 生之

明治廿五年四月二十五日
安藝豊濱村於中川氏生之



明治廿六年三月廿八日
備后萩原村於教專精舎
生之



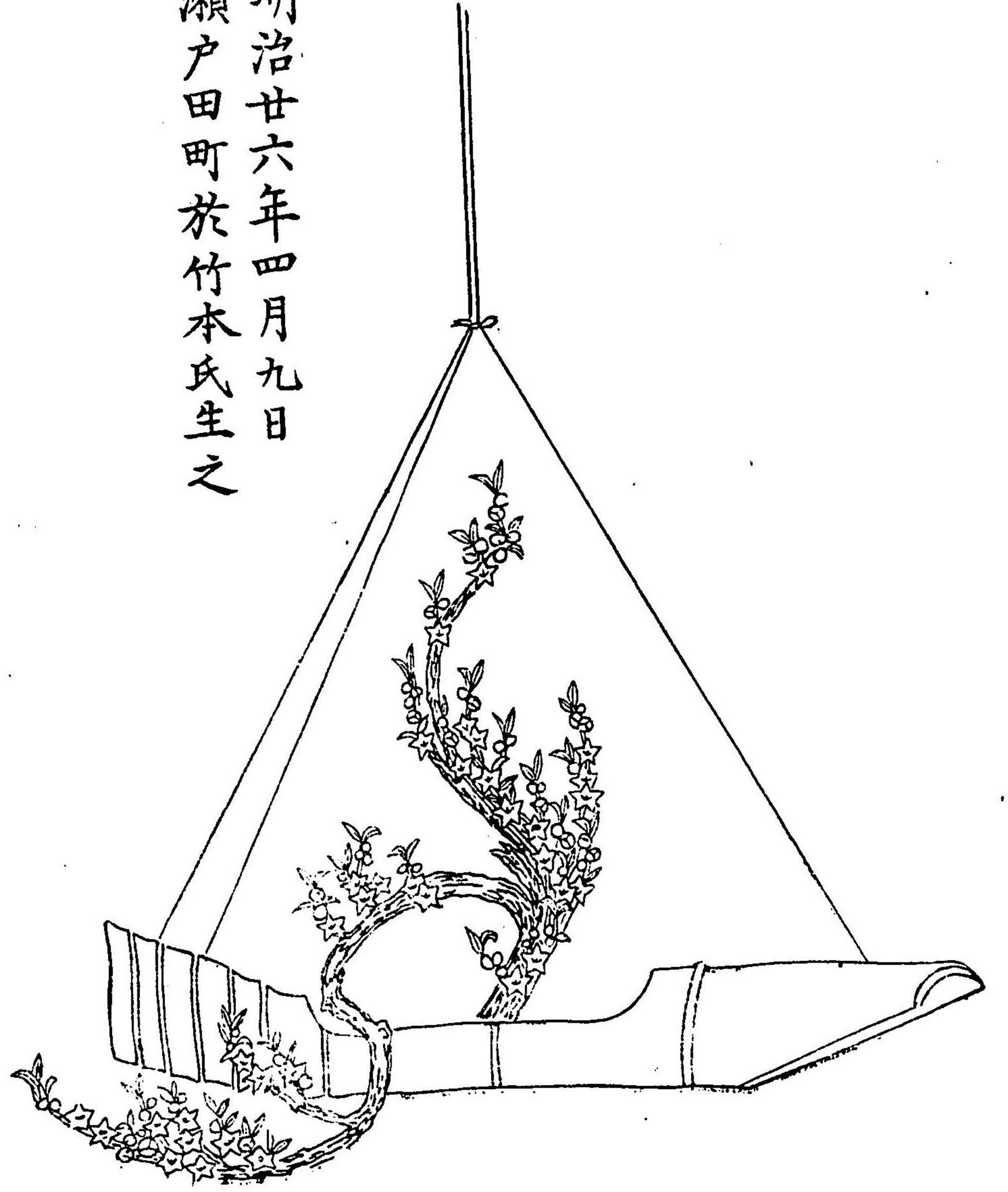
明治廿六年一月一日
瀬戸田於入澤生之



明治廿五年八月大州村
於村上氏生之



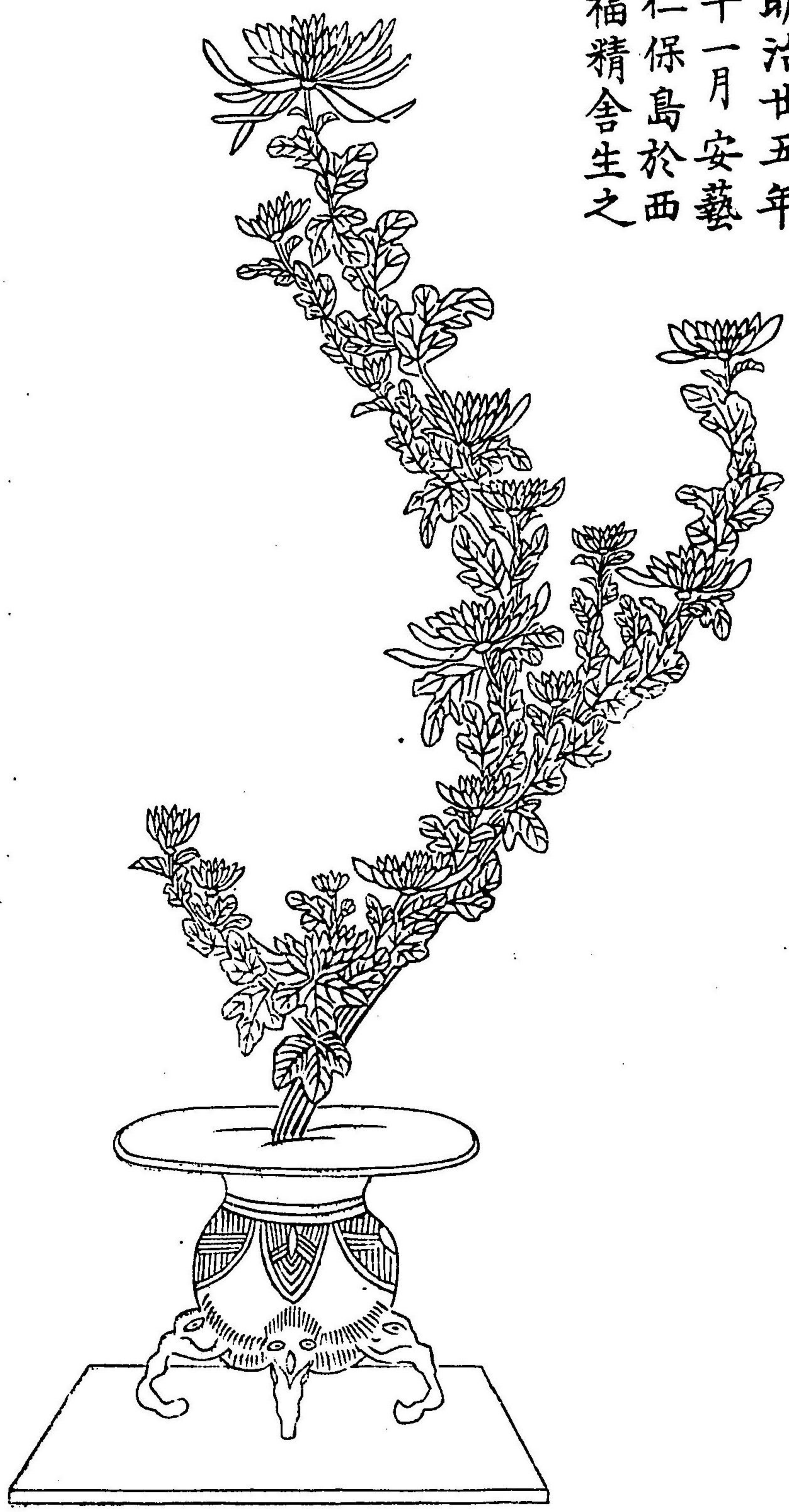
明治廿六年四月九日
瀬戸田町於竹本氏生之



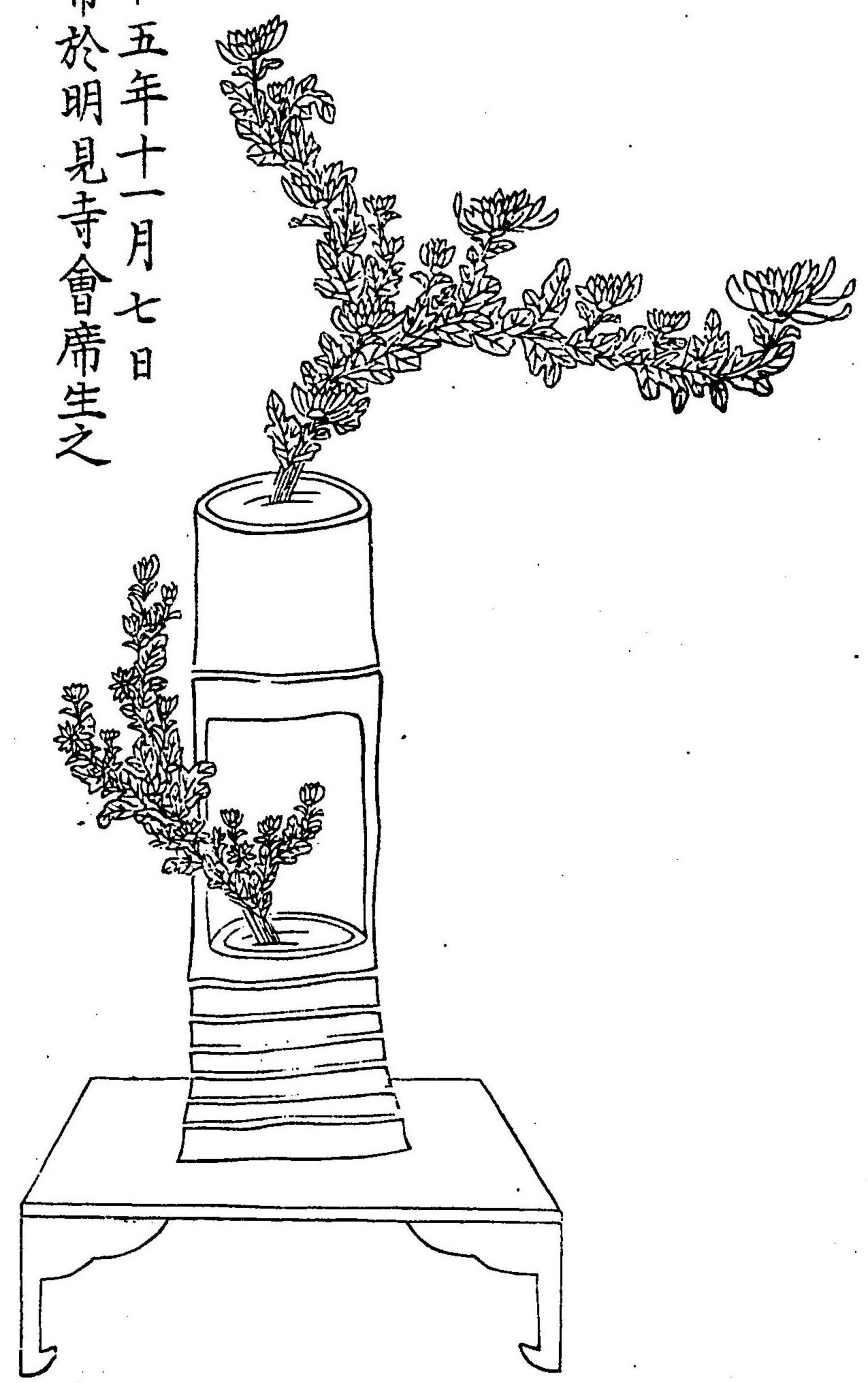
明治廿五年七月廿八日
瀬戸田町於入澤生之



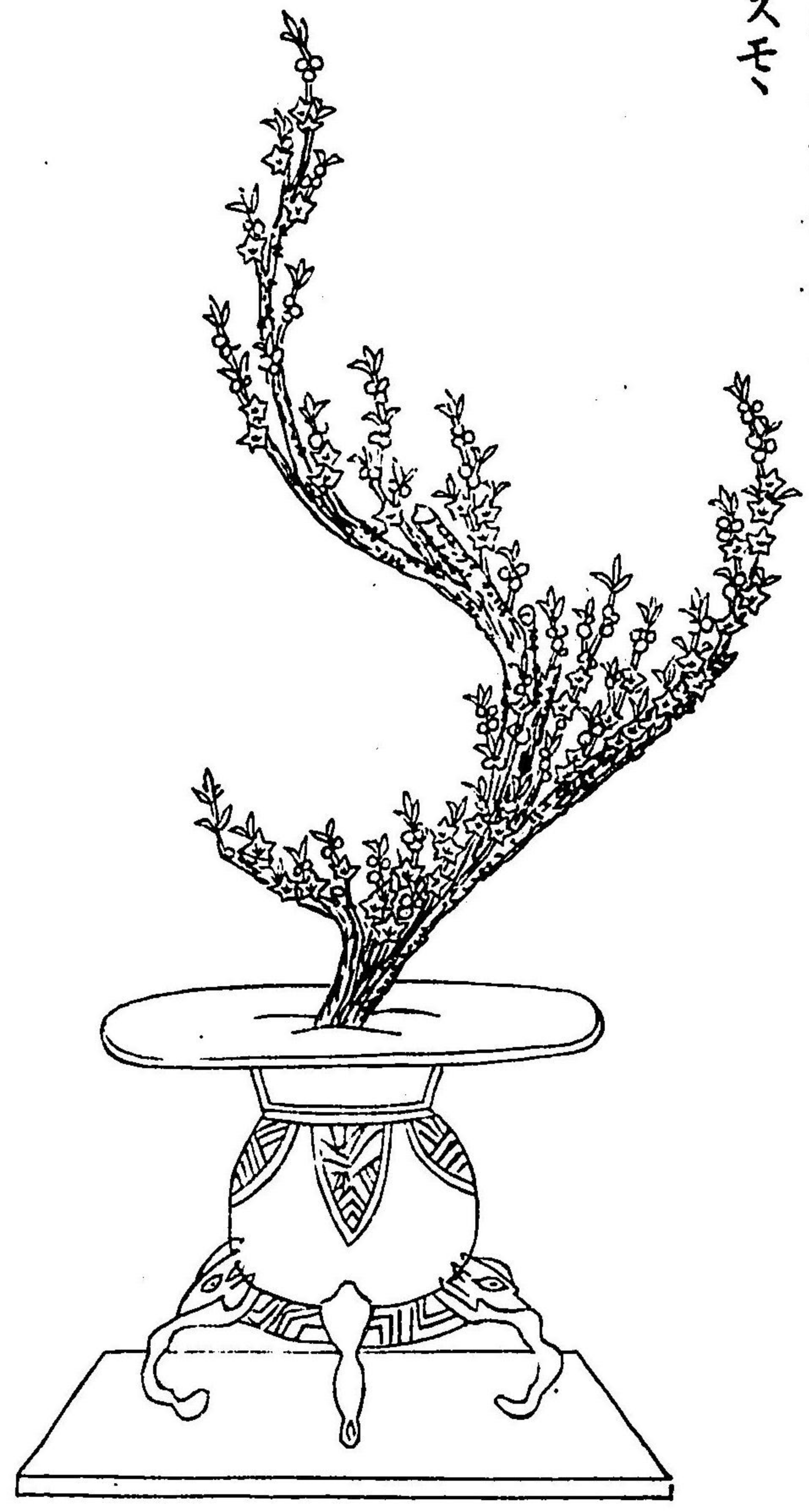
明治廿五年
十一月安藝
仁保島於西
福精舎生之



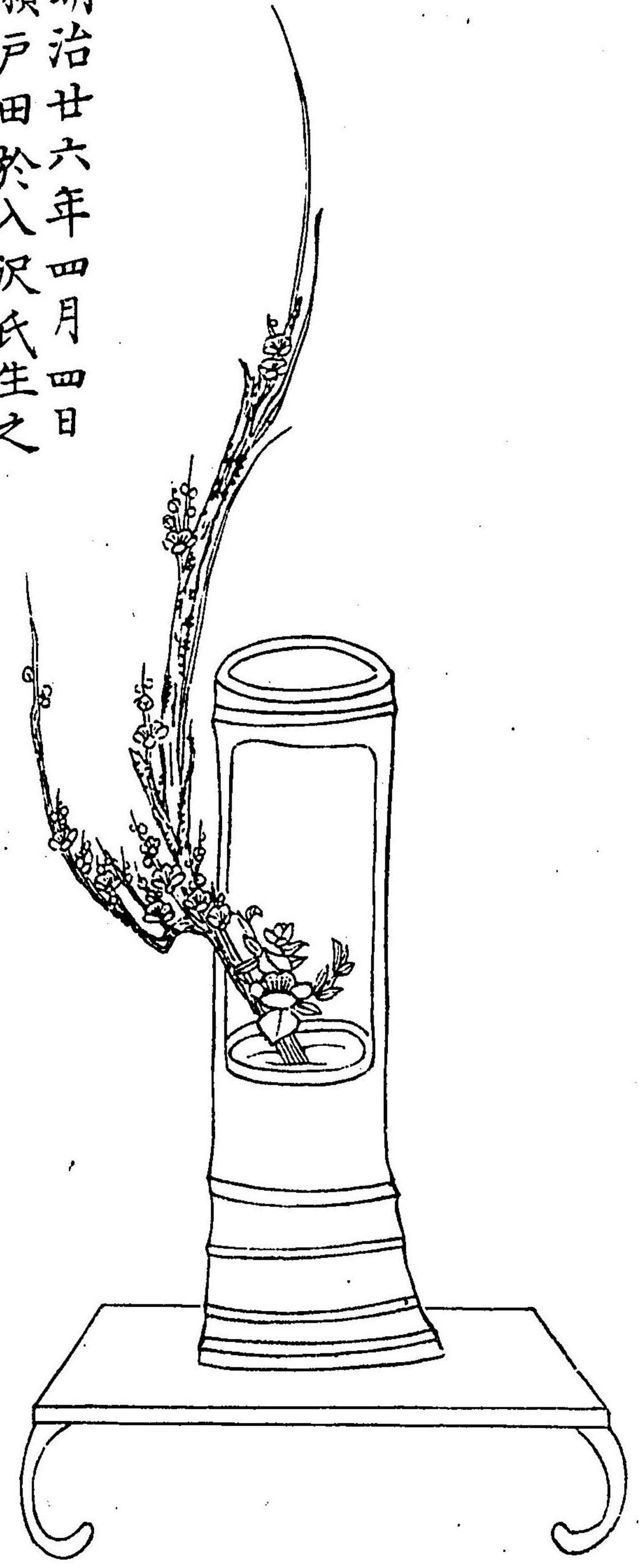
明治廿五年十一月七日
海田市於明見寺會席生之



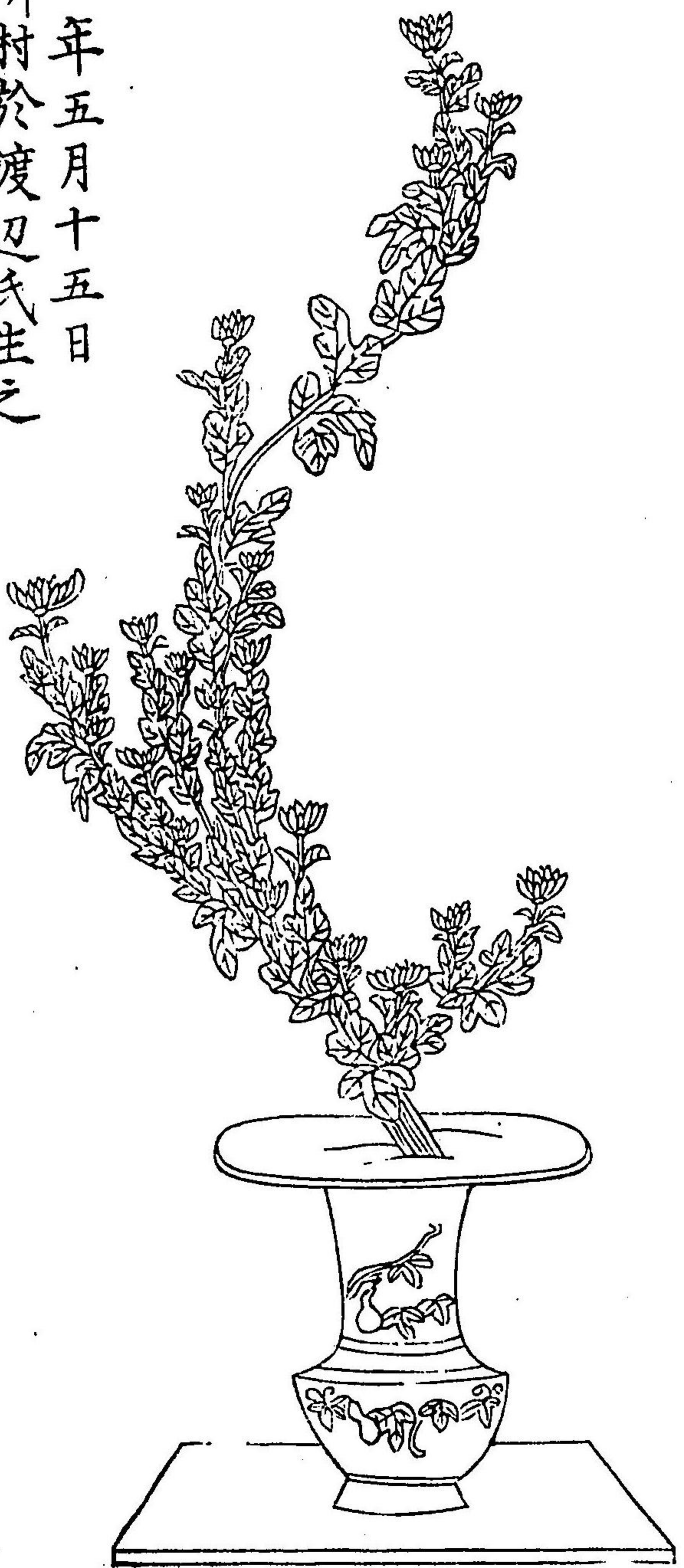
明治廿六年四月廿四日
安藝大艸村於村上氏
生之 又モ、



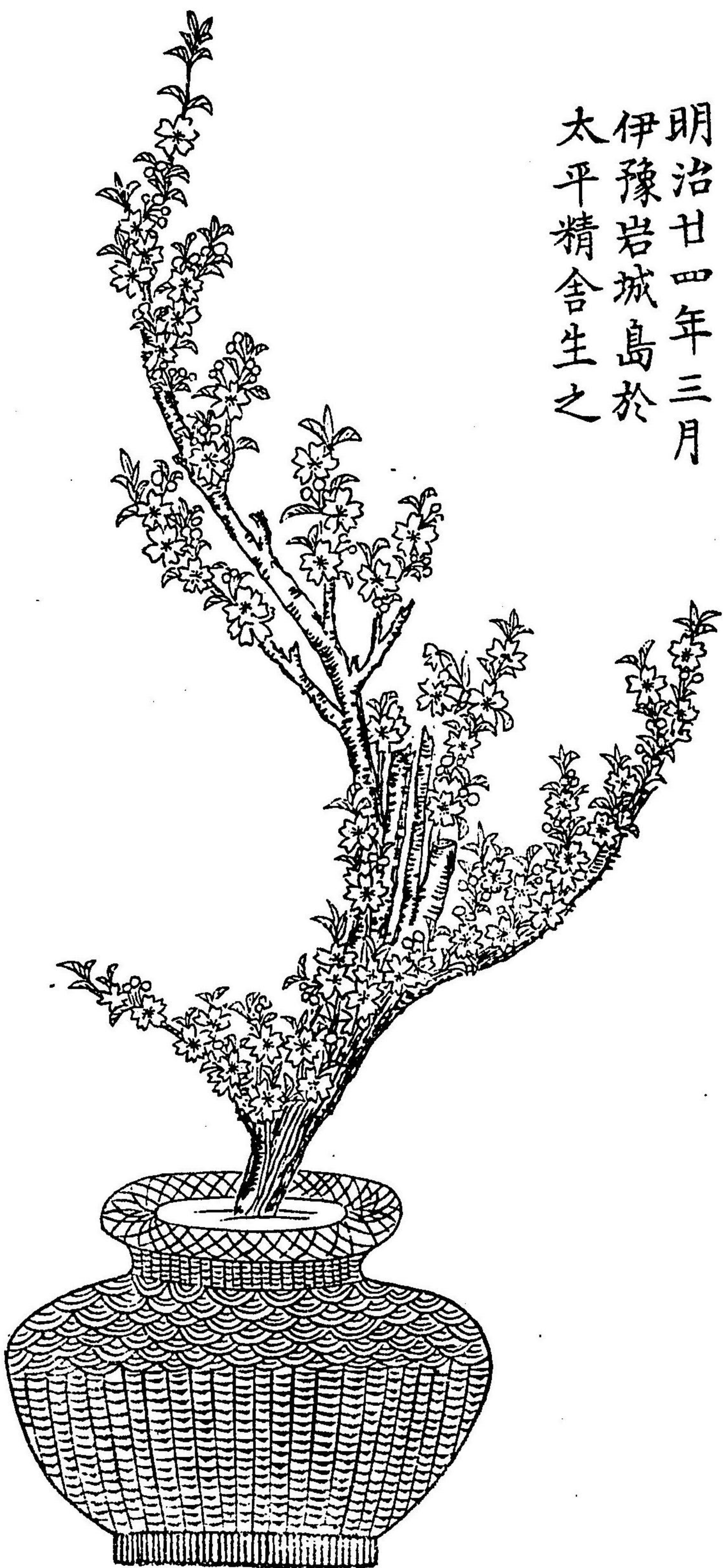
明治廿六年四月四日
瀬戸田於入沢氏生之



明治廿四年五月十五日
安藝納所村於渡辺氏生之



明治廿四年三月
伊豫岩城島於
太平精舎生之



明治廿五年十月十三日
安藝仁保島於西福精舎生之

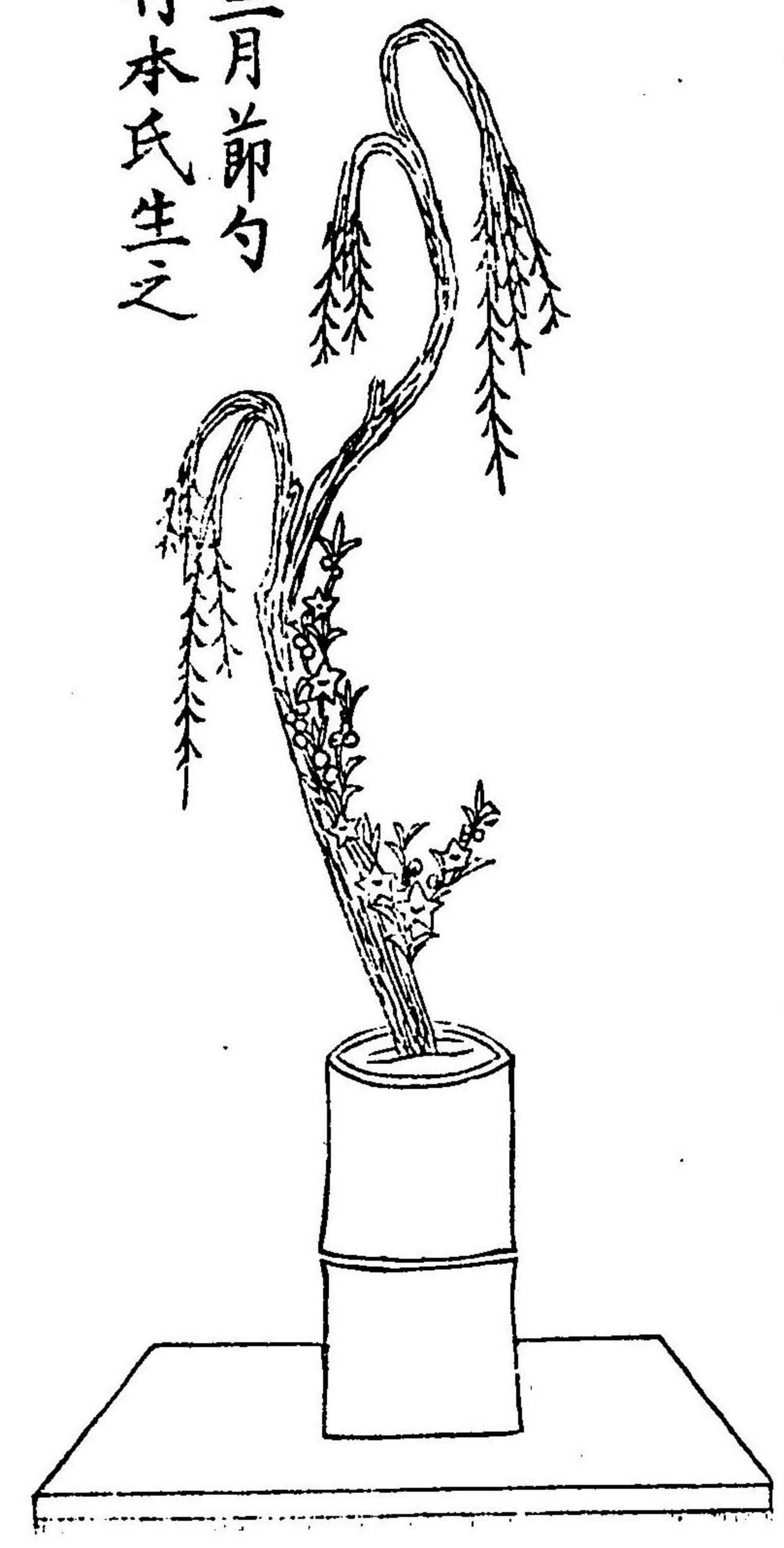


明治廿六年四月廿八日
大艸村於村上氏生之



桃物生今
子氏此
雖紅利

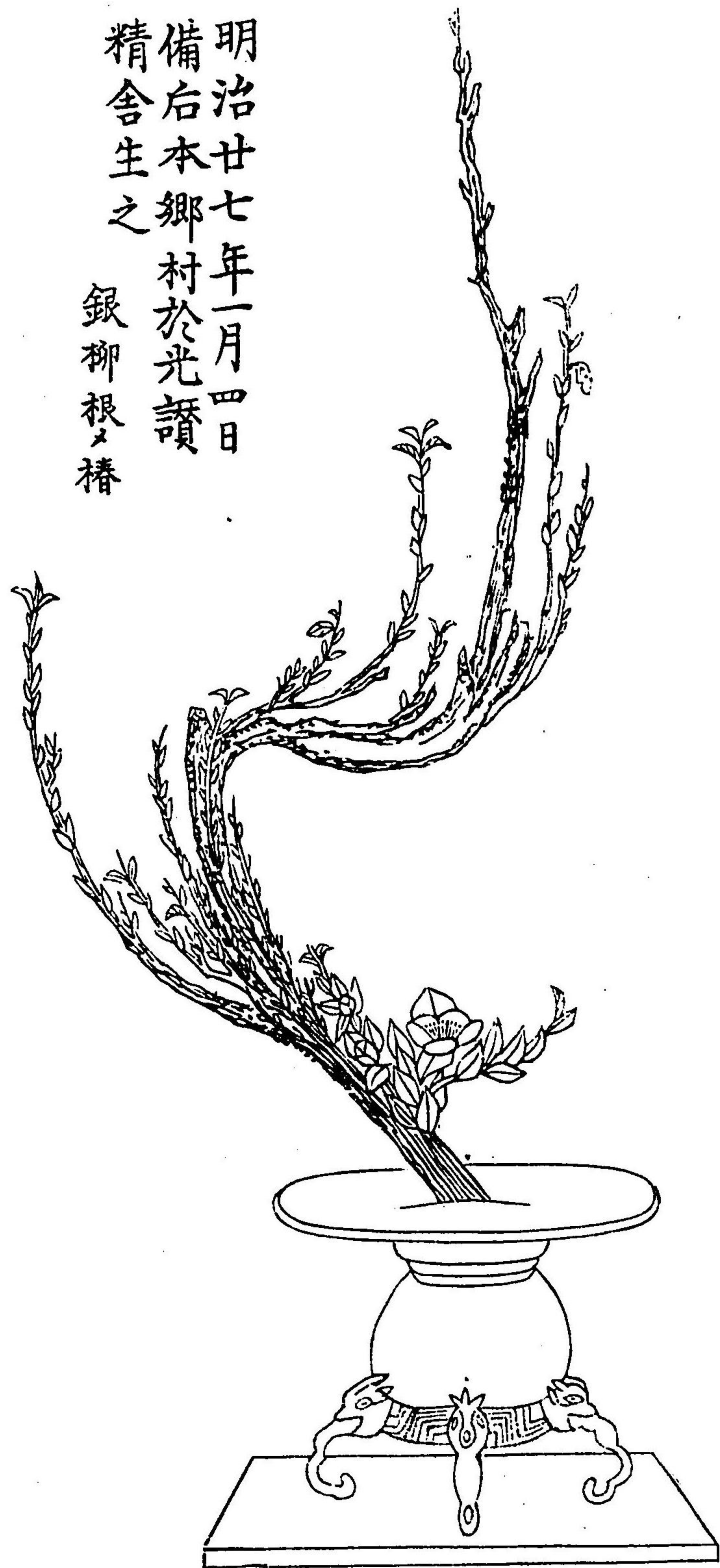
明治廿六年三月節句
瀬戸田町於竹本氏生之



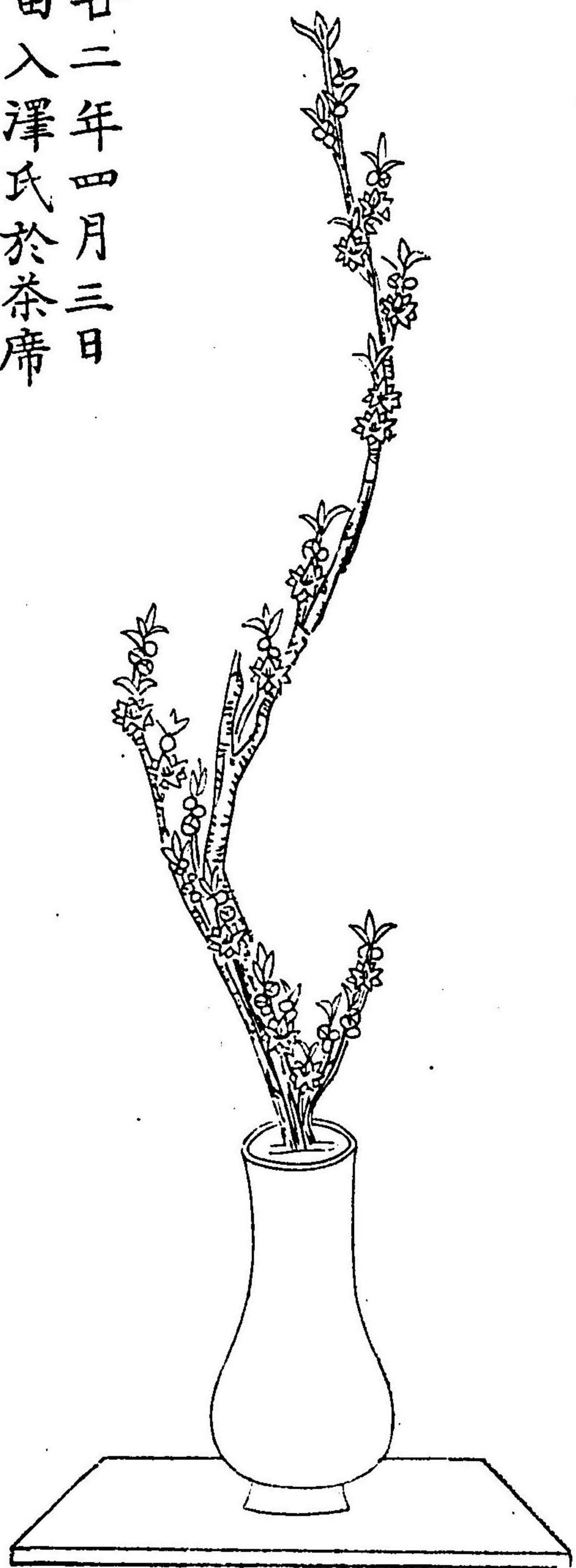
明治廿七年一月一日
備后沼隈郡本郷村於
賞雅氏生之



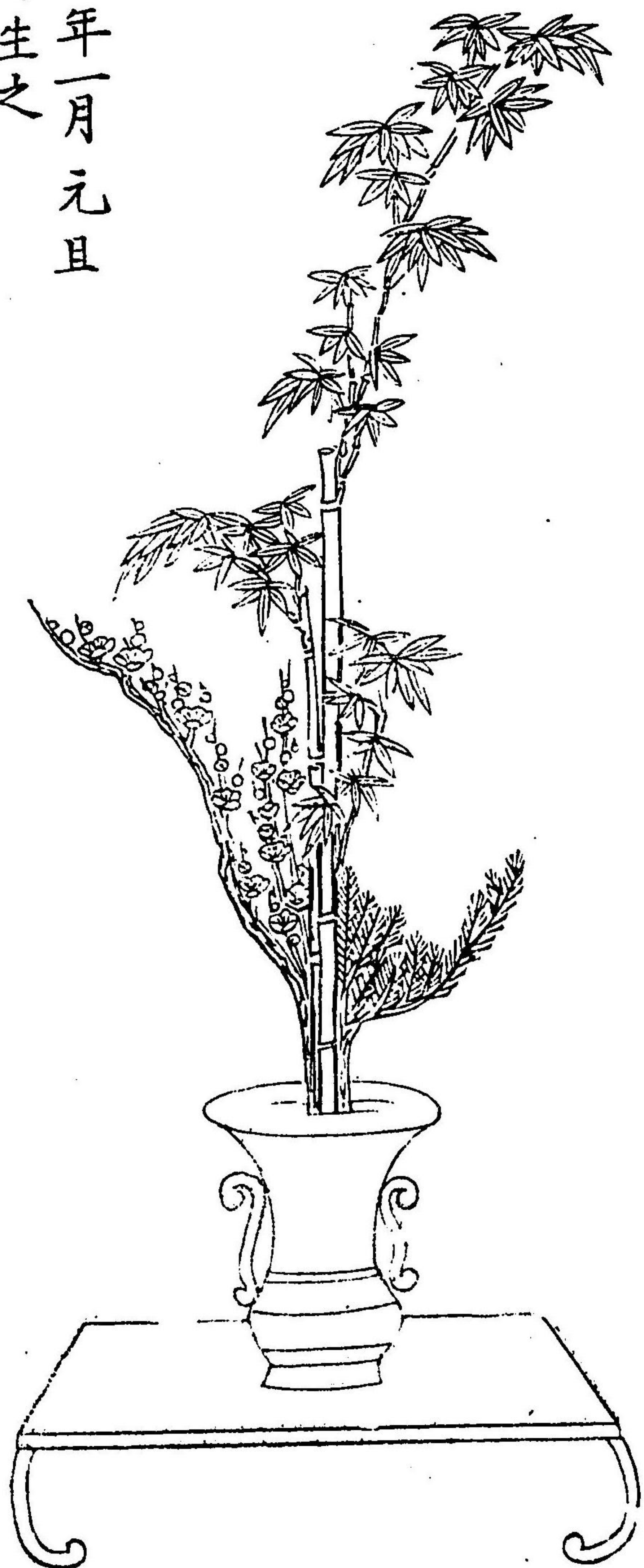
明治廿七年一月四日
備后本鄉村於光讀
精舎生之
銀柳根之椿



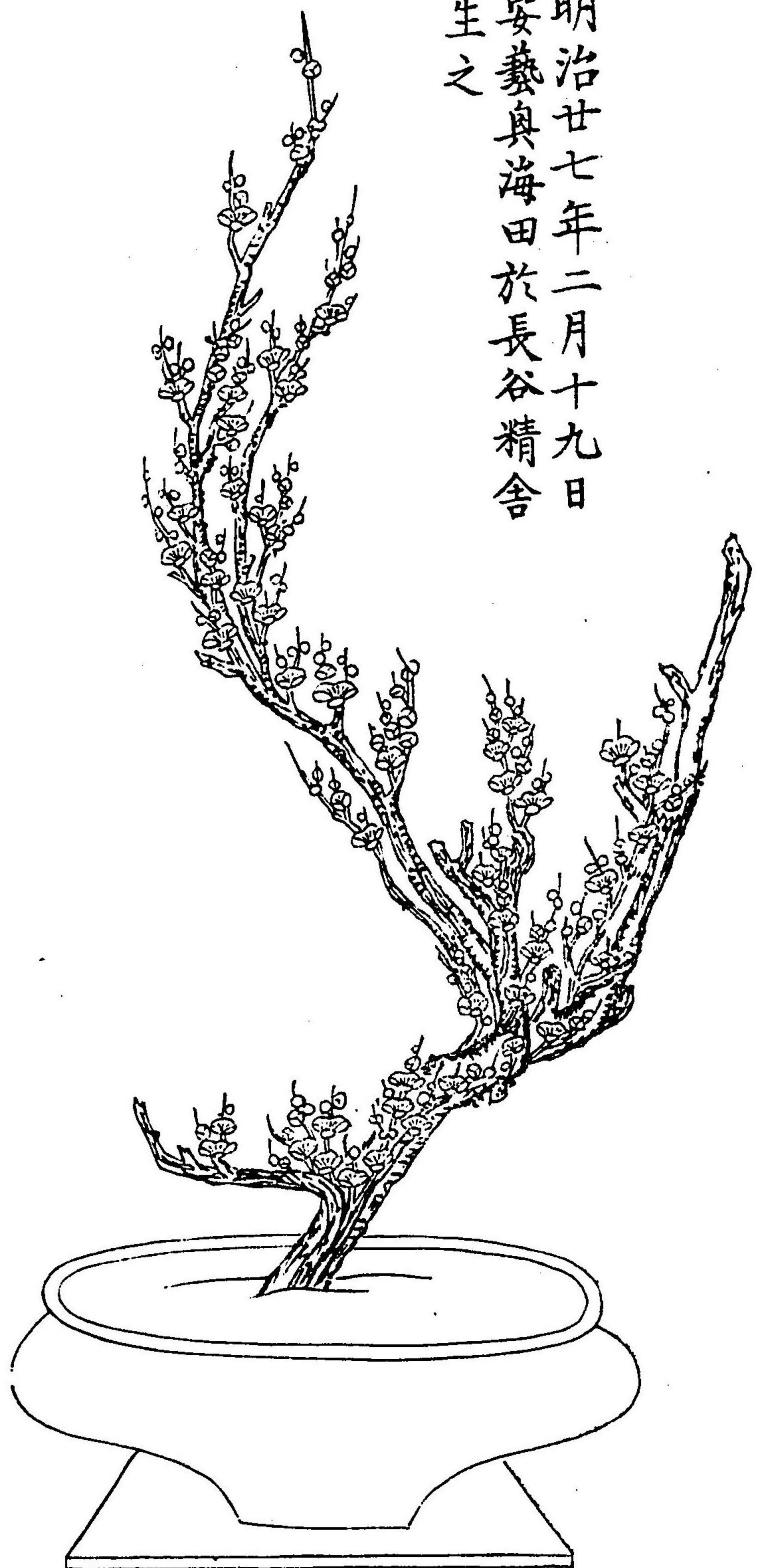
明治廿二年四月三日
瀬戸田入澤氏於茶席
生之
白桃



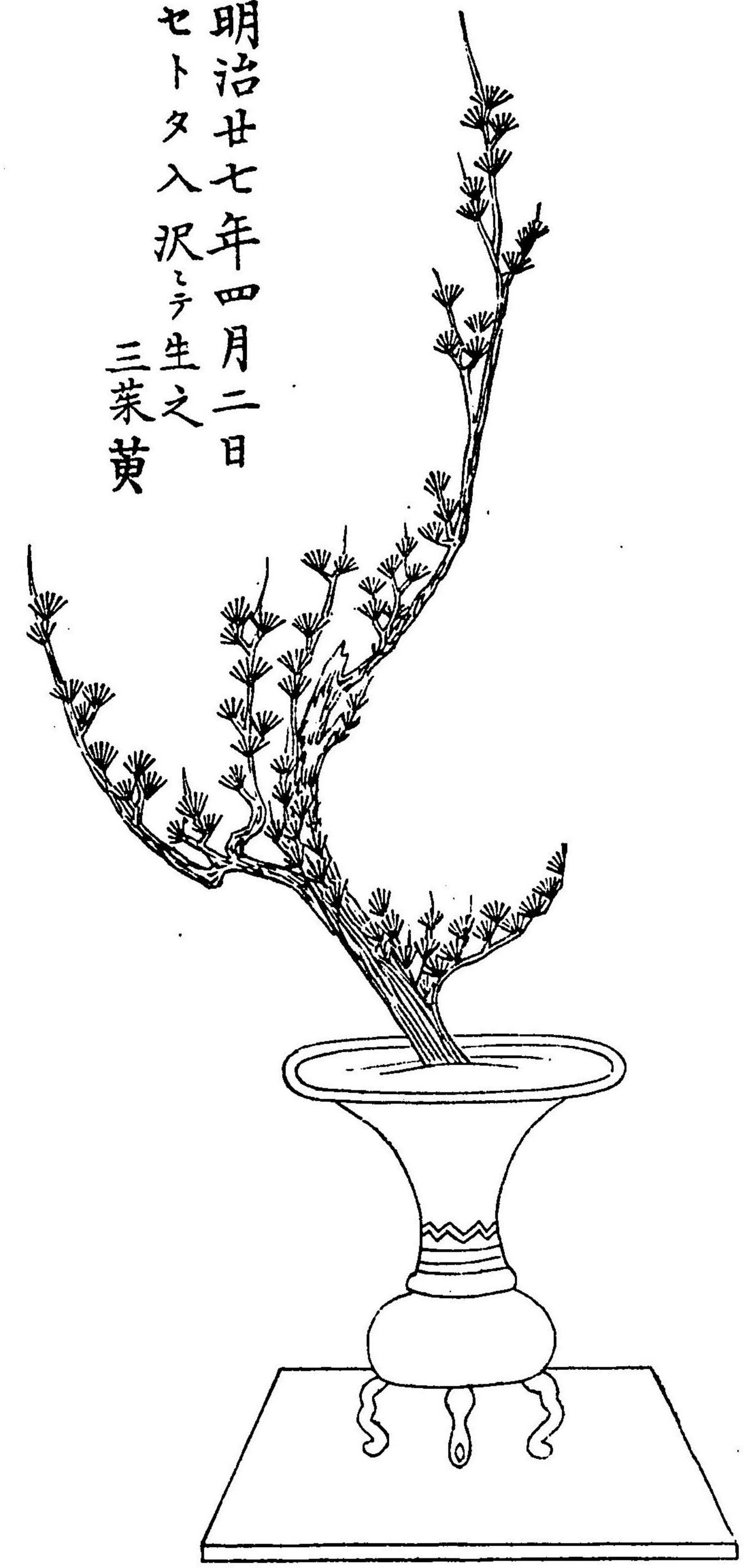
明治十年一月元且
於自坊生之



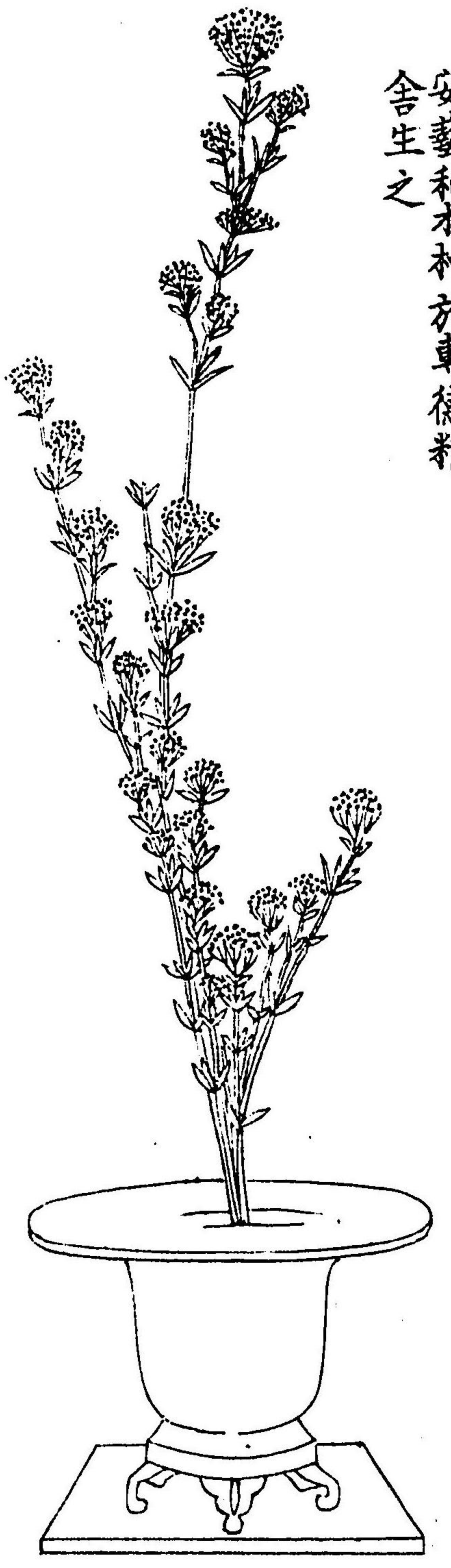
明治廿七年二月十九日
安藝真海田於長谷精舍
生之



明治廿七年四月二日
セト夕入沢ニ生之
三菜黄



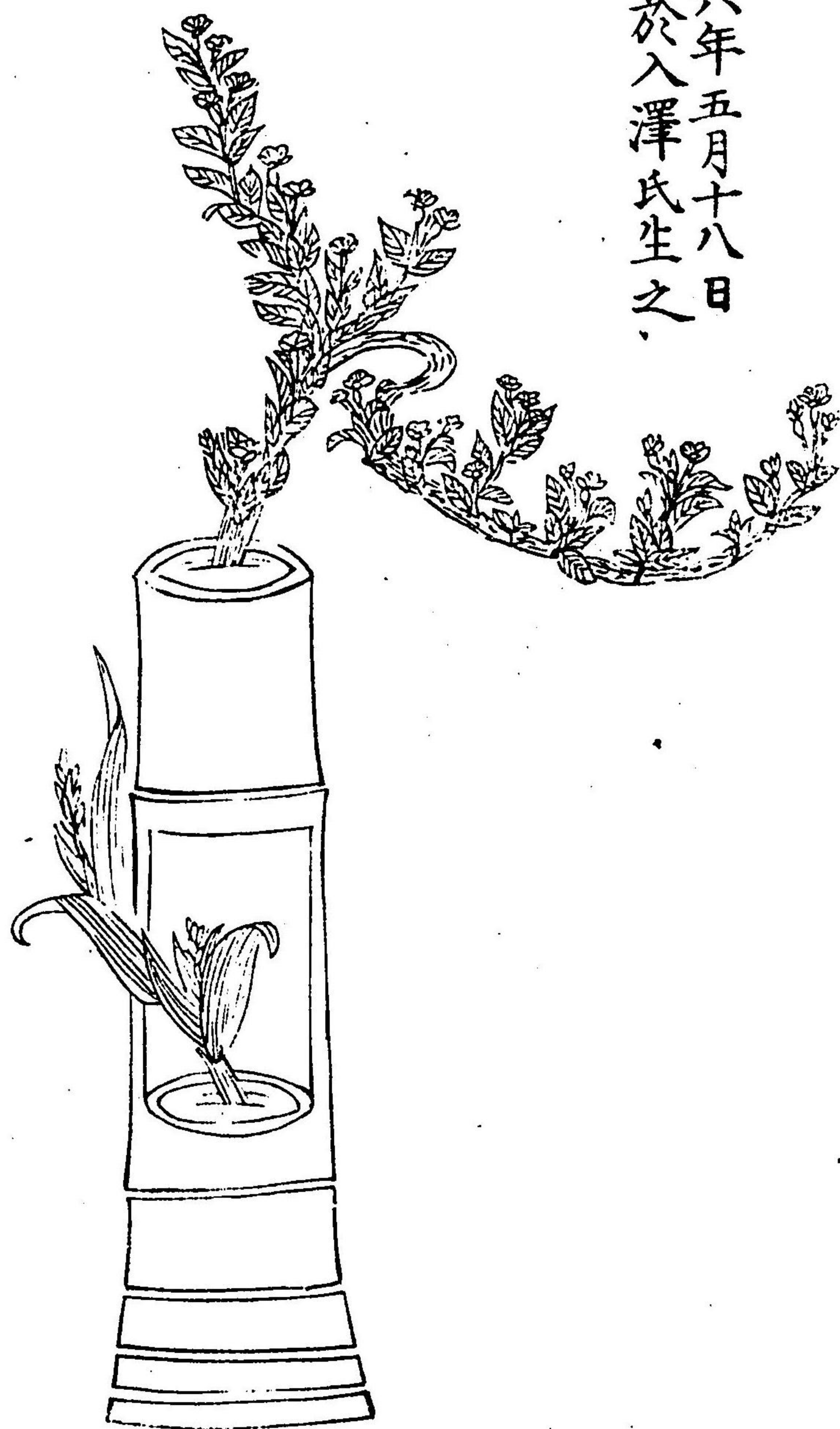
明治廿六年七月三日
安藝和木村於專徳精
舎生之



明治廿六年七月十日
備後田嶋於善照寺
生之



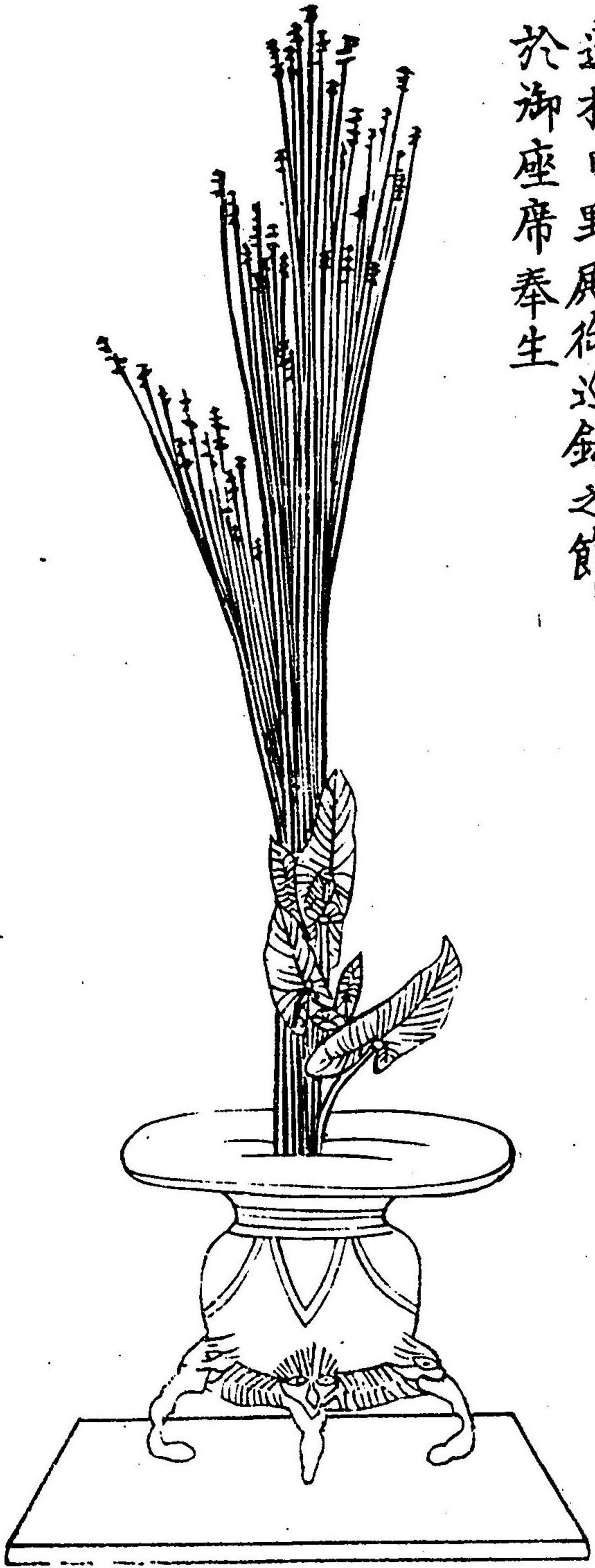
明治廿六年五月十八日
長谷村於入澤氏生之



明治廿三年八月廿二日
小泉村於恭藏精舎生之

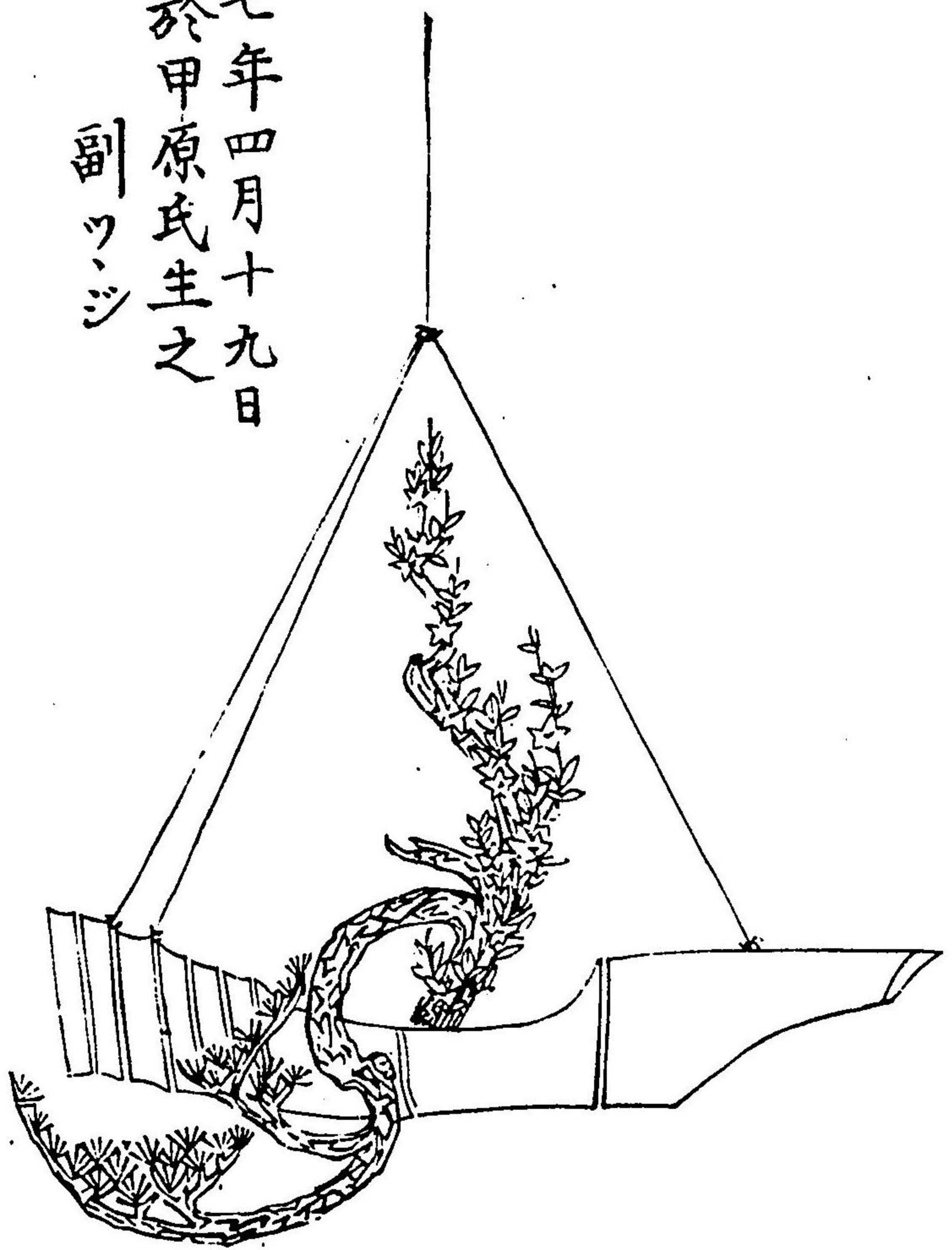


備后丸門田村正傳坊江
蓮枝日野殿御巡錫之節
於御座席奉生



明治廿七年四月十九日
小泉村於甲原氏生之

副ツシ



附録

○凡生花ハ先づ花器を花基ヨリ置いた花器ヨリ
 を七分目迄入き生花挿へたる時花配りヨリヨリ花器
 増を添へ而もて陰陽と在るやるを人好むるの
 事一ちり依て今爰に初道と云ふのたより利やあ
 利無しと思ひて左に圖の如く葉蘭を以て
 陰陽及び生花の客位を位し大要を記し
 大方の諸氏幸よ自方をも笑ふやいな

○陰陽及表裏の事



たる葉なり

此の陰を陽

陽を陰

さふは陰の葉より別はあつた陰を前よりしてさふ
が故に陰の葉よりと云ふ利

○はさひ陽の葉より陰を後にしてさふは陽の葉より見
陽の方を前に見てさふ故に陽は後と云
ふなり

○はさひ葉を裏とんば魚一即ち陰は方あり向
むいたる方を表と云ふ

即ち陽の方なり

○はさひ一 表より前は見るとさふ即ち陽の方なり
向ふは前を見たる方を陰と云ふなり

○葉は左より陰陽勝るなり

左の葉は如く中の筋を利左右に度きとせまはさありせま
方を後へ向け度方を陽へ向けると生と魚し右にせま
筋を前よりさふと見たりのせまはさあり利後へさふ
かく是れ
如くさふと見たる陰陽を合して陽と
お向ひ換兒 方よりお向ふをさふと云ふ
さふ一く生と魚とあり餘は活物よりさふと云ふ

考合へ

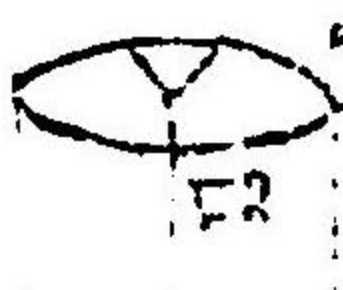


○生利解 生を人とす是を中と云ふより生をより生の葉は
天人地 半陰半陽と云ふは陰陽合解の葉より前より

皆来より向ふが故より前より後より
 後を前より見る事自然此理なり是より順して
 より後より後より又前より陽を見る事
 然る理なり

○花配りより又花握とも云ひ花留とも云なり

先づ生る草木を能く見立られを
 らびて切るなり一なるは花五七本式と九
 本と取り揃へて其根を一掃すつたわて又へは
 根一なるは又の方を先より果しく如く
 らぬを先より切りて是を花籠と又の方を
 字の字と云く通るなり



花筒の前

縁ちの外とを切りてとめると縁は長
 板よたやまき おさむるなり

○又数く葉の拵格なり

第一は生るの葉を見るなり次は生る
 割次は躰を見るなり雨立て二枚の
 右陰方なりと云はるなり



一真人也
老陽方

此の葉を依りて名階を抱え葉と云ふ
 浦よの葉なり 依て生る能く
 なふ根なる葉は拵ぶるなり

二副 (天也)



三副 (地也)



此の葉をさげりて抱へ葉と
名附て解より其副の縁
のたきぬよりより
ふものなり

○右五枚を組合せ見る事

生る是は復は生るとた見葉解とてかへ葉副となす
解はこれ其多まて組合せ見る事一之合り一其も
のりまに能くため並して拾ぬと見る事一之
こ葉と如し

如比生るとた見葉をて先は組合せ見る事一其は葉の
後半陽より一其は葉の前半陽より一其は葉の
一之の葉より解の葉の並に後と前とて
其生るは復一之組合せし
一方へ板をせて葉先ハ



○如比取合せ見る時ハ
抱へ葉ハ生るは属し

かへ葉ハ解ハ属し

生るとた見葉副解の

この外をて見ると花一籠と云なり

後方の前角
一振るる事一かへ
た葉をて如比全せ
りて

副の葉が生るとつて陽は方の
後河角廻りて

○五枝並に次第一なり

前の如く組合せしる花を花瓶に生る時に第一は幹と挿し二抱へ葉三抱へ葉四六五と副と次第一とをさし置し左に葉の如し

○此方後方と云ひ上座より

客位と云ふなり

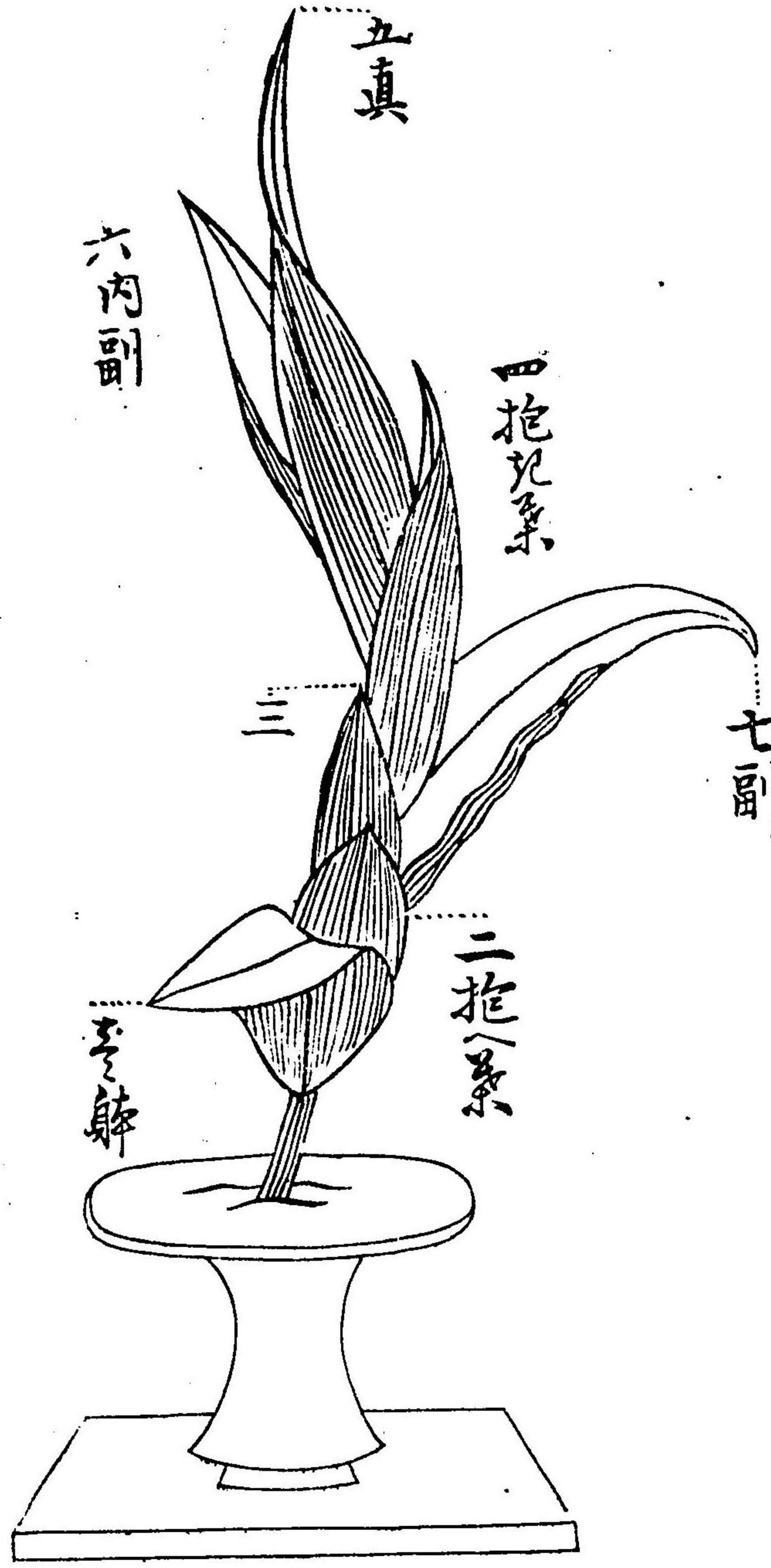


右に五枝へ或枝加へて七枝と云ふ時に抱へ葉の上へ綱と名附くを投入し副の上は少し真へ振りて副より小枝葉をさし投入し或は内副と名附く真のたまげは生るより後の方へさし入るもさし菟角其葉のお生を見て能く生副幹の志な以能く根よ生くるを置し後よある七枝の葉を能く見ゆるを置し

○客位主位と云ふ

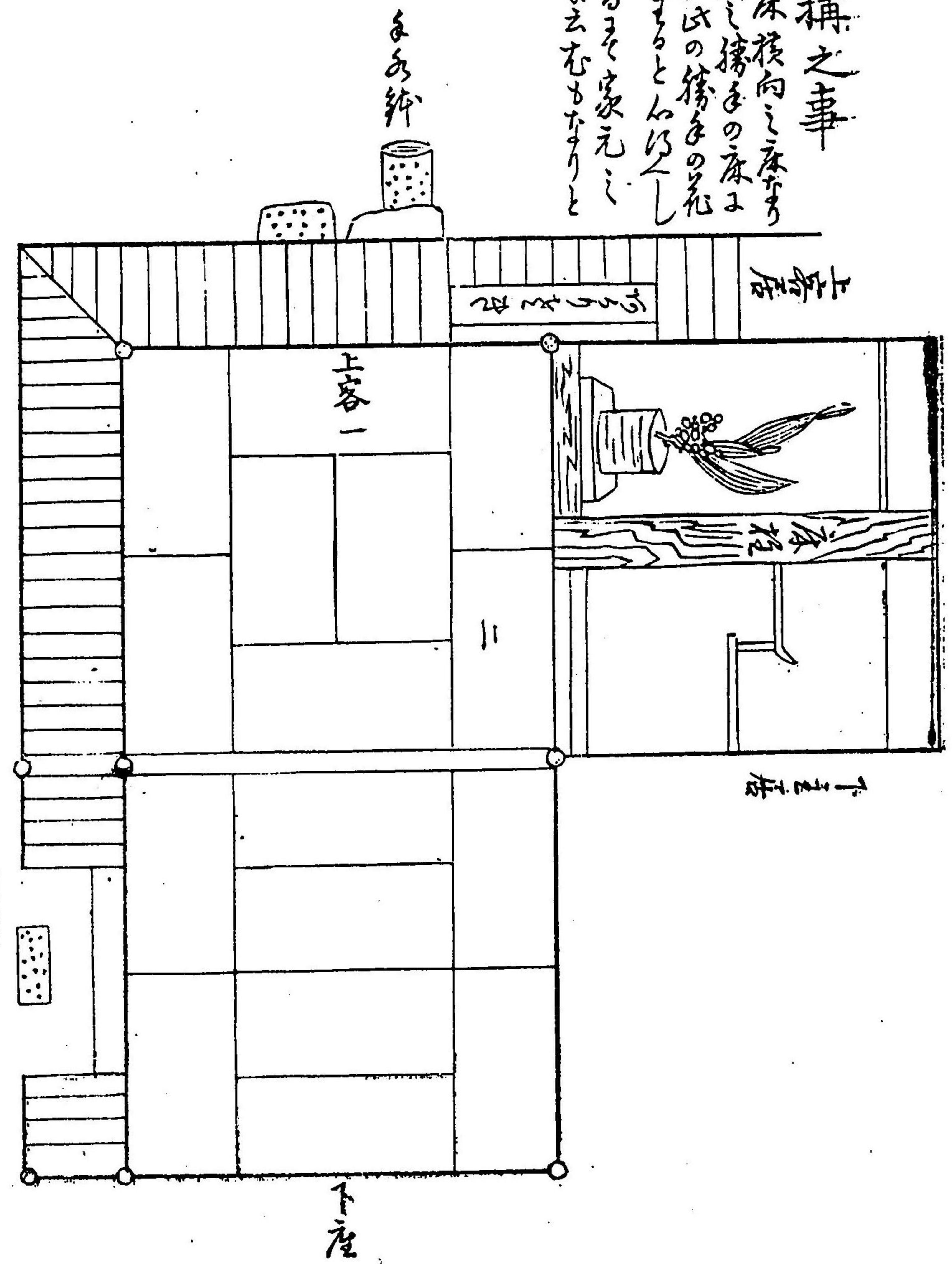
一瓶を生る時は客位主位と云ふ事なり後の方を客位と一冊ち上座なり陽の方を主位と云ふ事なり下座より一瓶の花を後陽と云ふ副の方を陽と

水仙の花のさきまはさうらゝむも水仙のさきまはさうらゝむ
 何れも陸地はさきまの物と水中に生る物と一と様上生
 る事なしは彼は常は花をさきまに見て師は花をさきまにし

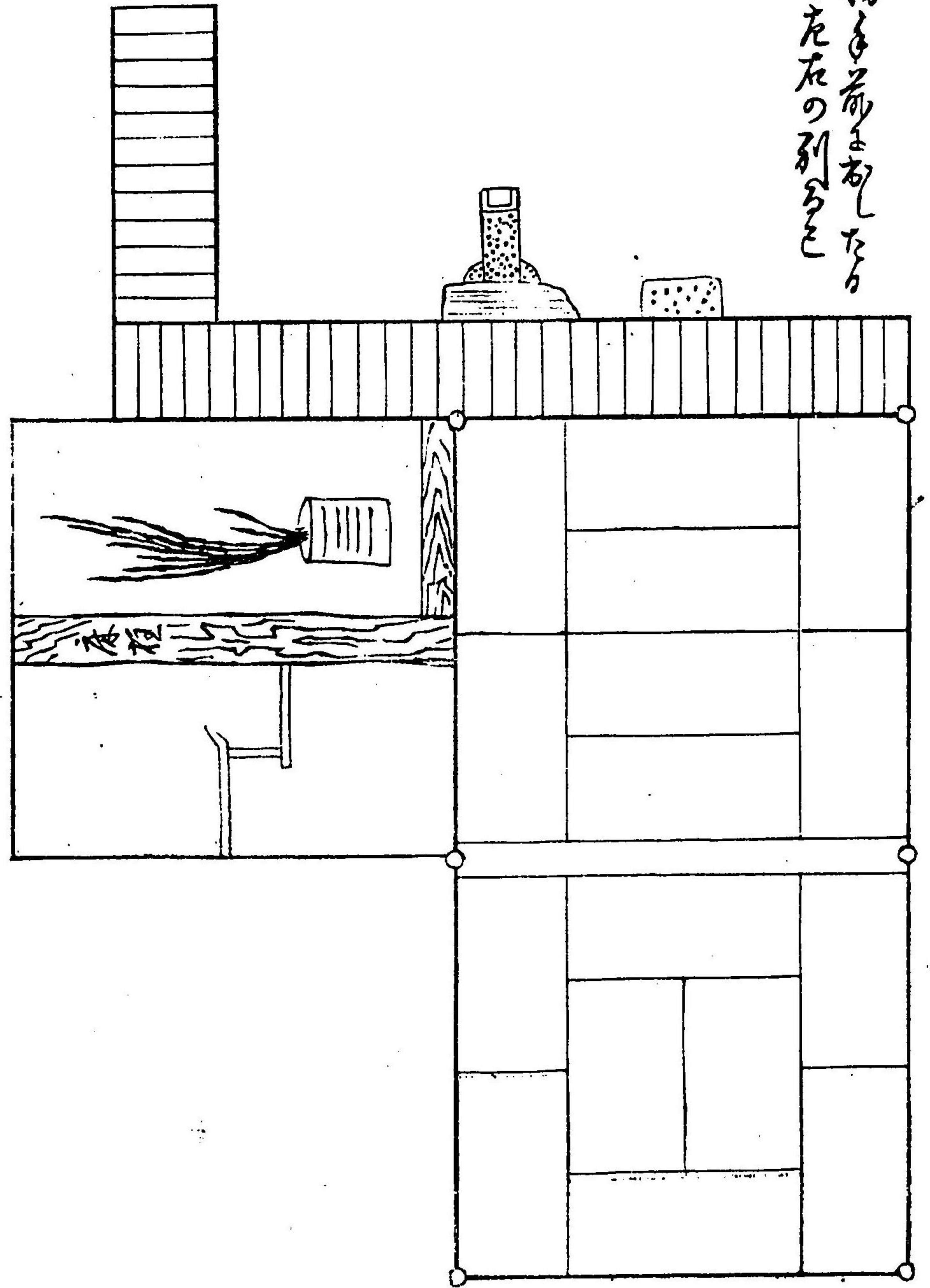


○床構之事

此床構向の床は
 如くは傍の床は
 ハ如くは傍の床は
 さきまとんじし
 ○床書より家元
 評よ云むもなりと

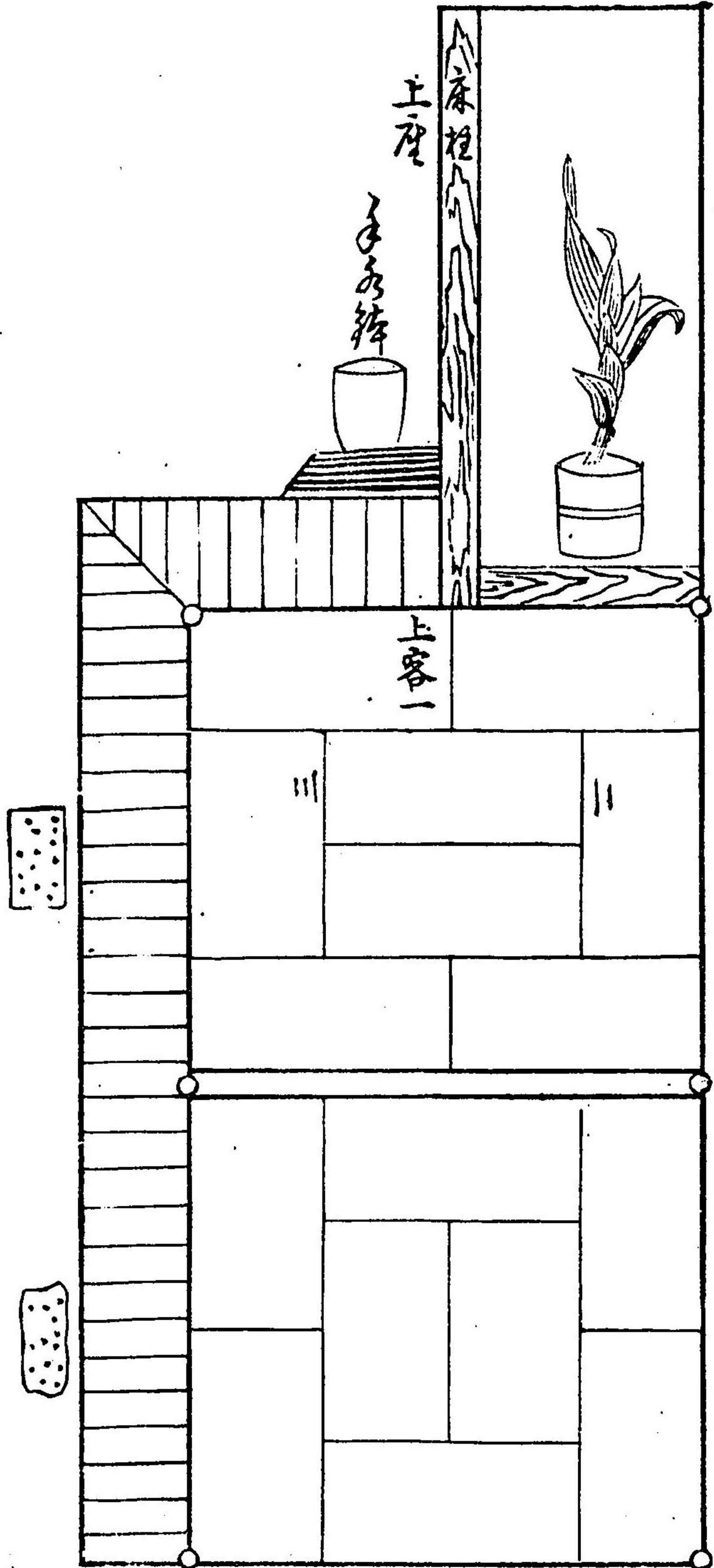


けつちの前のあしなる
果と左右の別をさ



家元と評と云は床作東都よてハ珍ラ志きむ
け床たききハ朱の如花も圖の如至極のつひかりとのり

朱とて
下座



192
83

こ花より次々くよ見ゆるるしこ花くの心面よ
産しと黙礼しこる事一節の如し
又同門弟集合の節又こ能者古今たりとも自
分の花を潰し他人の花を潰るるり何るるを
惣して自潰潰地たる事一法道の思むべきを
よみ成く慎むし一以ん外風流の花道に於てをや

翠陽房



明治三十三年九月廿日印刷
全 年九月三十日発行

非賣品

廣島縣備後國御調郡三原町拾番地
正明寺前住職

著作兼
発行者

入澤 晃 輪

全縣全國全郡全町
千八百七番邸平民

印刷者

久代 帛次郎

193
83

